



英国春秋

2 0 1 5 年 秋 号

I S S U E N o . 2 7

発行 英国日本人会



はじめに

家のリンゴの木に花が咲いたのが5月のはじめ。外側が薄いピンクで内側が白と、清楚な風情ながら、鈴なりに咲くので中々華やかでもある。しばらくして青い小粒の実をつけだしたのが6月の半ば。そうこうしているうちに、最近、庭が時々騒がしくなってきたと思っていたら、少し大きくなりだしたリンゴの実が、4つ3つと芝生に落ちているのを見かけるようになった。それらは一部が齧られたあとがある。犯人はい言わずと知れたパラキート (Parakeet、小中型のインコの総称) である。体長40cmぐらいで、長い尾をもつ薄グリーン色のこの鳥は、イミグラント・バードである。イギリスでは1969年頃に



初めてその姿を記録されたそうで、種類は日本語で“ワカケホンセイインコ”と訳されている。在住鳥に似合わず、体が緑で、くちばしが赤とカラフルであるが、夕方になると四方から集まってきて悪声でギャーギャーと騒ぎだすのと、リンゴを食い散らすので、私には害鳥である。原産地は南アジアやアフリカとあるが、どのような経路で“移鳥”してきたかわからないらしい。69年代だから、カレー経由のユロスターで来たのではないのは確かである。現在、南イングランドに棲みついて、30,000羽近くに増えてきたらしいが、ケントあたりの果樹農園はその被害を被っていないのかと気になる。今年のリンゴジャムの生産は、我が家ではゼロになりそうだが、スーパーの店頭では今のところ、品切れの気配はない様子。

秋号の特集は「私の人生」でしたが、まだまだこれからと思われた方が多かったのか、意外に少ない集まりでした。頂いた作品の中で「人生50年・・・」と言われて、遥かに過ぎたわが身ながら「これからを無為に過ごすな」との思いで読ませていただきました。また、わずか4歳で将来の職業を決心されたご本人が、今、北方領土返還問題などに心血を注いで、我が国の為に働いていただいていることを知り、非常に力強く思ったりもしました。

『英国春秋』秋号27号の完成。今回投稿いただいた会員の皆様、そしてゲストライターの方々、大変有難うございました。年2回の発行とは言えその号数も年々増えて、区切りのよい数字30号までにはあと3回、それではその後とは、編集作業を終えてホッとしながら、将来の文集に思いを馳せたりしています。何はともあれ、「次号、春号の特集は何かが良いか」ともう半年先のことを考えている自分自身に、“春秋と心中”は下手なシャレにもならないと苦笑しています。今後とも皆様のご支援を宜しくお願い致します。

特別寄稿 有地芽渥氏 (SOAS Senior Teaching Fellow)
宇山秀樹氏 (在英国日本大使館総領事兼総括公使)
大林尚氏 (日本経済新聞社・欧州編集総局)
中沢賢治氏 (在ロンドン元国際機関職員)
マクドナルド昭子氏 (Multi-Cultural Management & Consultancy/MD)
(アイウエオ順)





*** も く じ ***

はじめに			
英国春秋歌壇	九十九髪	バロー典子	4
炉ばた焼き		ビドル 恵	5 - 7
英国春秋豆辞典			7
英国春秋歌集	夢心	マクドナルド昭子	8
英国春秋歌集	二都物語	マクドナルド昭子	9
英国春秋俳壇・歌壇	野辺の薔薇・風よ	古川 隆	10
英国春秋俳壇	薔薇匂う	エリオットつやこ	11
ロンドンで行きあつたジャーナリストの聖地		大林 尚	12 - 13
俳句について		クーパー矩子	14
英国春秋俳壇	ヘザー咲く	矢嶋蓉子	15
仏像の魅力		有地芽湮	16 - 18
「夢幻のごとくなり」		加藤節雄	19
私の履歴書		宇山秀樹	20 - 23
Life is Fun		古沢いくこ	23
我が郷里と友への手紙		渡邊道英	24 - 26
英国春秋歌壇	お百度参り	古沢いくこ	27
漱石のロンドンと赤い雛罌粟		中沢賢治	28 - 29
私の父親像		ガフニータミー	30 - 32
ベートーベンの第九が5ポンドで聴ける		渡邊道英	32 - 33
ハンニバルと信長	カンナエの戦い・桶狭間の戦い	小川のり子	33 - 35
英国春秋あれこれ			35



九十九髪 (つづら髪)

バロー典子

九十九髪 白く薄くもなり賜う 母の帽子を
棺に加えて
(99才の母を見送る)

ふるさとの 神社の濠の たもとにて
鯉眺めし 白寿の母と

母逝きて ひとり眺むる英国の 小庭にロビン
われに寄り来る

“日本は 猛暑”と聞けば 思われる ふるさとの母
今は亡かりし

朝焼けは 雨降る予兆と 羊飼いの 忘むと聞けども 美しきかな
英国の リンゴの花の 散りゆくを 桜に似たりと 思い眺めつ
並木路に 光と陰の線ひきて 木漏れ日ひかる 夏は来にけり
花々は それぞれの美に 輝やけり 人もみな かくはありなむ

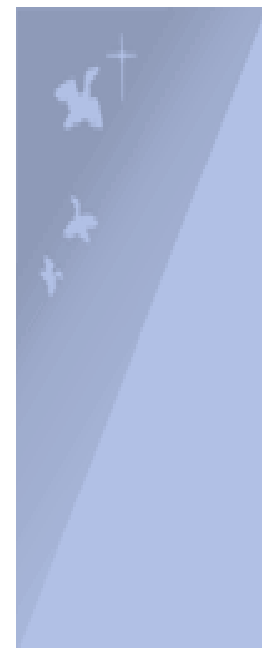
年ごとに 人気上昇 ジャパン祭り トラファルガーの
獅子が見守る

大ないの 支援に謝して 造られし 福島庭園
あじさい栄ゆ

緑なす 丘陵はるか とこしえに 羊遊ぶや
コッツウオールド

もう二度と 原爆の悲のなき地球 平和な世界
祈りてやまず

(8月6日)

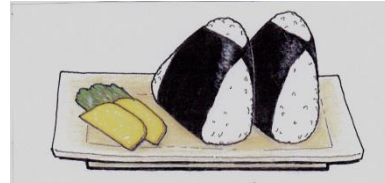


炉ばた焼き

真っ黒いおにぎりといクラの話

ビドル 恵

何かの弾みでふと食べたくなると、もう居ても立ってもいられなくなるという食べ物がある。人に依って私は鮭だ、私はカツ丼だ、いやラーメンだと色々あるが、私にとってのそれは何と言っても筋子（鮭の卵の塩漬け）入りの、半切りの海苔でくるんだ真っ黒いおにぎり。そう思ったら最後、今すぐ、待たなし！という気分。あの魔力はいったいなんであろうか、某生理学者の説に依れば、「食欲とは、かつての好ましい経験からくる食物摂取への欲求」だそうで、さもありなん、私には真っ黒いおにぎりに、かなりの思い入れがある事に気付いた。



カット : めぐみ

1960年代の後半になると高度経済成長の波が、私の住んでいた足寄町にもやっと届き始めた。阿寒国立公園の絶景と湯治が目的の観光客が急増し、そこへの通り路（駅前から観光バスが出た）に位置した足寄町もその恩恵を受けて景気が上昇したのであった。駅前やその周辺の繁華街の発展から始まり、木造だった町役場や病院、学校等次々と鉄筋コンクリートに建て替えられ、公民館や図書館、映画館も二軒建ち、私が中学校に上がる年からは学校給食も始まった。しかし、我が家の赤貧暮らしはあい変わらずだったので、給食のお陰で昼食は確実に食べられるようになったけれど、今度はその給食費が払えずに、クラスの前で“督促状”を渡されるという恥ずかしさに耐えねばならなくなった。

この頃の母は、下の二人の子供と父を食べさせた上に、兄に高等教育を受けさせてやりたく、帯広市に住む母の妹夫婦の所へ兄を下宿させていたので、その費用を稼ぐ為に以前にも増して働き詰めであった。夏場なら、昼間は土方や道路工事の旗振り、夜はホステス、週末はスーパーで天プラ等の惣菜作り。土方仕事の無くなる冬場は、阿寒湖畔の旅館に住み込んでの仲居と我武者羅に働いたので、兄が無事、国家公務員試験に受かり、ひとり立ちして行った後は精根尽き果てて倒れ、とうとう入院する破目となってしまった。



流石の父もこれには驚いたらしく、改心して奮起一番、仕事に精出すかと思いきや、父がしたのは母の退院を待ち兼ねるかのように店を持たせた事だった。残った家族四人の生活と入院費の返済もあったので、今度はラーメン屋ではなく、もっと実入りの良い炉ばた焼きの店であった。父の狩猟仲間の内に、帯広市でこの種の店を営んでいる人がおり、高度経済成長のおかげで大手企業の地方進出が始まり、建設工事や道路開発、それに伴って入って来る札幌市や内地（本州）からの出張、単身赴任、出稼ぎの人達を相手に、北海道の旨い魚で酒を飲ませて、飯も喰わせるという商売が大当たりしていたのだ。

その人の店に姉を送って商売のいろはを習わせ、足寄町分店という形で同じ店名を使う許しを貰ったり、酒を出す商売にはつきものの地元の顔役への挨拶等、得意の口八丁を駆使して資金を掻き集めてまわり、店に使いそうな空家まで見付けて来るといった大奮闘ぶりであった。

そうして開業に漕ぎ付けた“炉ばたのあかり”は町立病院の真向い、北海道には珍しい間口二間九尺の、京都様式の町屋を改造したものだった。繁華街からは少し外れていたし、店も八帖大と小さかったけれど、炭火で焼いた魚の旨さと、山小屋風の内装に人気が出て、我が家の暮らしは確かに楽になった。その上居住部分も、店の奥に六畳の茶の間と八畳の座敷が続き、二階には四畳半の子供部屋。店に隣接した九尺幅の通り庭にあたる所が板敷きの調理場で、玄関庭には犬も飼い、収納棚のある廊下（走り庭）を抜けると、我が家で

は初めての屋内トイレも付いていたから、今までの長屋暮らしとは雲泥の差であった。とは言え、病み上がりの母の事店に立てない時もあり、姉が結婚して家を出た後は、昔のホステス仲間を頼まなければならず、すでに中学三年生になっていた私は仕入れと帳簿付け、営業中は客から見えない調理場で、下ごしらえや御飯物を作ったりして手伝った。(父は髪結いの亭主気取りで、開店後は再び遊び呆けていた。)

好きな魚を焼いて貰い、焼燗の酒をいっだけ飲んだ後の御飯物の定番は、なんと言ってもお茶漬けとおにぎり(それに秋口に限ってのイクラ丼と冬場には鍋焼きうどんが加わった)であるが、お代をいただいてお出しするので、家庭で作るものより少々手間をかける。

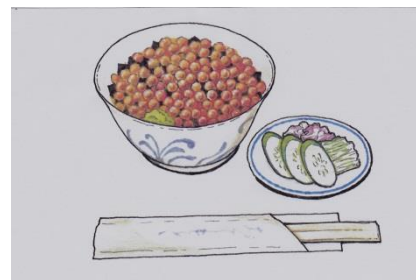


カット : めぐみ

まずお茶漬けは、丼に軽く熱いご飯をよそい、その上に四つ切の海苔と焼いてほぐした塩鮭、梅干し、筋子等を注文に応じて載せる。そこへ醤油をひとたらしした熱々の一番だしをたっぷりとかけ、丼の縁に練りわさびを添えて勤める。これはお茶がどこにも入っていない“お茶漬け”だが、だし汁の旨みとほとびたたっぷりの海苔の分ずっと豪勢だ。

次におにぎりの方であるが、タネが梅干し、おかか、塩鮭、たらこ、筋子の五種で、これが二個に漬け物が添えられる。私は中学生になると夏休み毎に、雌阿寒岳の麓、オンネット一湖畔に在ったユースホテルに泊まり込んで、おにぎり作りのアルバイトをしていた。朝食の仕度の前に、登山者用の昼弁当として一日平均三百人分、計六百個のおにぎりを毎朝四時起きして作るのだ。梅干しとおかかの二組に別れ、当時はまだおにぎりの型など無かったので、ひたすら手で同じ形と大きさに握っていく。この経験があったから、三ッ切りの海苔が付いた三角のおにぎりは、今でも作るのが得意だが、店で出すものは炉ばた焼きの野趣味に合わせて、半切りの海苔ですっかりくるんだ、丸くて真っ黒いタドンのようなでっかいおにぎりであった。

あの頃は使用する海苔の大きさと黒さが値段を決めたから(今でもそうか)、遠足の時にもって行くおにぎりの海苔の色は、子供達の間でも重大な事であった。横目で盗み見ては値ぶみし、他の子より黒ければホットし、薄くて緑色に近い時は、見られぬ様にあさっての方を向いて急いでほおぼる。だから売り物の真っ黒いおにぎりを作っている私には、これが食べられる客のことが羨ましくて仕方が無かったものだ。



カット : めぐみ

それでも時折、札幌あたりから出張で来ているのだろう優しい小父さんが、調理場から暖簾越しに、母とやりとりしている私を目敏く見とめ、「娘さん?まだ中学生?お母さんのお手伝いしているの?偉いねエ...」といった会話になり、「お腹すいてないかい?夕食に何か作って食べなさい」とお許しをいただく事があった。そんな時は食べ盛りの中学生の事、さっそくお言葉に甘えてこの真っ黒い、それも大好物の筋子入りのおにぎりを作って食べた。旨かったですねこれが...

この店を手伝っていた頃、私は辛いとか嫌だとか感じたことは全く無く、根が好きだったのだろう美味しいものを作るのが楽しい程であった。むしろ母と一緒に居られる時間が増え、料理や食材のことあれこれと話をし、母の知識の深さに感銘し、且つ私が一人前の人間として頼りにされているというか、役に立っているのだと、母に少し近寄った気がした幸せな日々であった。その上赤貧暮らしでは絶対に口にすることの無い、様々な美味しい物を取り扱い、たまにはお相伴にもあやかれて、私の食物にたいする興味が一気に開花し

た時でもあった。これが私の真っ黒いおにぎりに関した好ましい経験である。

さて秋口になって、新鮮な鮭の腹子（房入りのままの生の卵）が市場に出回ると、イクラ丼の始まりだ。丼に盛った熱々の御飯にもみ海苔をたっぷりとかけ、自家製のイクラの醤油漬けを御飯が見えなくなる程に、これでもか！これでもか！とたっぷり載せて出す。客はそのボリュームと添えた練りわさびの香にツーンときて、嬉し涙と鼻水で顔をグシャグシャにして召し上がる、といった趣向である。

おにぎりやお茶付けに使う筋子は、北海道で獲れるベニザケやシロザケ（トキサケ）の卵を房に入ったまま塩漬けにしたもの。ちなみにこのシロサケが秋口になって脂がのってくるとアキアジと呼ばれ、これを塩引きにしたものが新巻サケである。イクラ丼に使うイクラは、このサケの卵を醤油漬けにしたもので、秋口から冬場迄と食べる時期が短い、家庭でもごく簡単に作ることができる。生の鮭の腹子を買って求め、冷流水に晒しながら丁寧に薄い皮膜や筋を取り除きパラパラにほぐす。それをザルに取って水気を切り、タッパに予め用意しておいた醤油、酒、好みで七味等を混ぜた漬け汁に浸し、冷蔵庫に一晩置くだけで翌日にはもう食べられる。漬け汁を吸ってイクラの粒はパンパンに膨らみ、口に含むとプツプツと弾け、卵の持つ脂肪の旨みが熱々の御飯や酒に最高に合う。店で使うものは日持ちさせる必要が無いので、このパラパラのイクラを漬け汁から引き上げて別の器に移す。下に溜まった漬け汁に浸したままにして置くと塩味がきつくなり過ぎたり、生臭みが出てきたりする為で、こうしてもうひと手間かければ上品な味が保てる。



北海道では今でも生の鮭の腹子が、九月から十一月の旬の時期には五百円から千円ぐらいで買えるので、辛党の家族の居る家では（兄弟も含めて）この自家製イクラを欠かすことが無い。そして、そこは“ジンギスカン”のたれと同様、各家庭で漬け汁の醤油と酒の配分が微妙に違い、「俺ん家の方が旨い」と言った競い合いになる。（兄の家ではこの頃酒を使わず、昆布醤油に漬けるので少々塩辛い、味に深みがある）

英国に住む私にとって、鮭の腹子は幻の食物。日本食品の店でパック入りの冷凍か、解凍されて半ばつぶれかけた塩漬けのイクラにお目にかかれるのみ（あとは鮭屋か）。高級デリカテッセンや空港の免税店で見かける、北東欧やロシア産の瓶詰めになった雀の涙程のイクラ（時には鱒の卵だったりする）ときたら、そのとんでもない値段に“二の足”どころか“たたら”を踏んでしまう。こればかりは兄弟が羨ましくて歯がみする思いだが、コレステロールを気にする年頃、「体には良くないのだぞ」と負け惜しみを言って溜飲を下げる他ない。とはいえ、私の帰郷は、できれば秋口と決めている。

英国春秋豆辞典

俳句では鮭は秋の季語で、海で育った鮭が産卵のため、秋に大群で川を遡ってきます。初鮭、鼻曲鮭、鮭来る、鮭上る、鮭打ち、鮭嵐

白波の 背波立つあり 鮭のぼる 皆吉爽雨

また、鮭に似ている魚で鱒があります。やはり秋の季語として、江鮭（あめのうお）あめうお、あめます、みづさけ、琵琶鱒などがあります。

あめのうお 目まで染まり 孕みたる 富岡計次

英国春秋歌集

マクドナルド 昭子

夢心

夢追い心、宙に浮かぶは雲のよう
つかんでは消え、つかんでは消え
夢見し想いの偶像を、
つくっては集め、つくっては集め
心の器大にして、
拾っては詰め、拾っては詰め
確かな感触、今そこに
夢心が形となり
触れては喜び涙する
実現間近と予感する
あの幸運の恵みし我が情感を
期して悦ぶ幸運を
分けて満るは清流の
汲めど流れる 夢心

虹を渡れば

久かたの、我がふる里も、時と消え
友の情けに おもかげ忍

すばらしき、友に囲まれ、身に余る
とわの情けに 幸せ涙

これ程に、友が 集いし、我が帰郷
心引き締め、謙虚を 学ぶ

問ふ都度に、深みにはまる、心底の
その謎解きに 青色吐息

花となり、雲となり
風にゆられて、雨と花びら

月となり、星となり
夜空のひと時、流れ星くず

雨のち、曇り、虹を渡れば
夢、此処彼処



英国春秋歌集

二都物語

マクドナルド 昭子

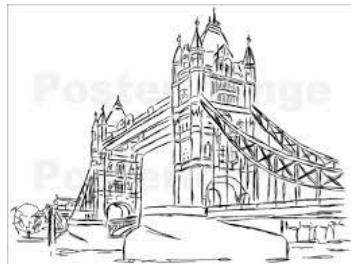
我がふる里の、東京よ
年々歳々、千差万別
移り変わりが激しくて
幾数千万の人込みの
その雑踏に、紛れ込み
模索、考察するは、人の常
自己検索と、我が身を置けば

嗚呼、虚しや、異国の地
我が身離れて十数年
片身はすでに イギリスの
我が愛しや 家族の内
息子、娘に恵まれて
一心同体主人と共に
この地に骨を埋めると
その定めに従いつ

今更めく 我が思うには
嗚呼、東京よ、
焦がれ恋しは 昔の夢
我が故郷は、東京にあらず
千差万別、その東京に
心の住処、見当たる筈もあらず

吾、すでにイギリスの
ロンドン中を駆け巡る
生きる処となりける
身も心もイギリスの

この地の言の葉、巧となりて
慈悲おおらかな、ロンドンの
心の中に溶け込みて
吾、イギリス人と変わりなく
日々を過ごすは、複雑な
心のひだを、なんとする





英国春秋俳壇・歌壇

古川 隆

野辺の薔薇

咲き誇る 牡丹に偲ぶ 逝きし友
手折らずに そっとしておけ 野辺の薔薇
雨よ降れ 雨よ降るなの 夏の日々
藪蚊無く 読書楽しむ 宵の庭
庭に臥し グラス傾け 夜もすから



風 よ

風よ 頬を撫でる やさしき風よ
お前は いつも 我らを慰めてくれる
風よ 雨雲をもたらす 恵の風よ
お前は いつも 我らに糧を与えてくれる
風よ 嵐をもたらす 猛々しき風よ
お前は いつも 我らに 破壊をもたらす
風よ お前は なにゆえ かくも異なる顔を持つのか
そうか それは 我らが性(さが)とかわりなしとか





英国春秋俳壇

薔薇白う

エリオットつや子

幸せはここにありとてバラ白う

墓石のなんと冷たき八重桜

しずしずとあやめ一輪立ちにけり



おおぞらと写す猫の目すみれ色

藤ゆたか蕾ほぐして風のまま

雨あがり蝶もつれあい飛び去りぬ



さびしかり友の引っ越し夏至の午後

豆ごはん来客のある昼げ時

喜雨ありて大地一面緑なり

いろいろなこと過ぎていく秋桜



ロンドンで行きあたってジャーナリストの聖地

大林 尚

ロンドンに住むようになって間もなく1年半になる。2014年の初め、会社の上司に呼ばれ、赴任辞令を受け取った。「欧州総局勤務を命ず」といった内容だった。

青天の霹靂と言っていい。新聞社に入って30年。そのほとんどを東京で過ごしてきた。20代の頃に3年間、国内支局勤めを経験したが、それは千葉支局。東京駅から千葉駅へはJR総武線快速で45分ほどだ。千葉市は首都圏の大都市。当時、人口は80万ほどで、その後、政令指定都市になった。赴任当初は地方都市で取材する醍醐味を味わうのにはほど遠かった。そう思っていた。しかし任期も後半になると、南房総や銚子の自然と味に触れる機会がしだいに増え、千葉も捨てたもんじゃないなと思うようになった。住めば都である。



何れにしても、記者人生のほぼすべてを東京圏で過ごしてきた身にとって、突然のロンドンへの赴任辞令は、やはり青天の霹靂だった。なにしろ、旅行や短期の出張ではなく、海外の街に居をかまえ、生活するのだ。ことばは聞くことも話すことも覚束ない。これまで記者として一貫して東京で発行している新聞に、日本の読者向けに、日本語で記事を書き続けてきた。取材は100%が日本語。英語を話す機会はなかった。齢五十をすぎての異国での独り暮らしは、厳しい試練である。

そこで、思い出したのが四半世紀前の千葉支局での生活だ。最初は「面白みがないところだなあ、それまで暮らしていた某市に比べると田舎くさいし」と、ネガティブな反応が先に立っていたのだが、それでも徐々に生活の基盤が固まり、地元で知り合う人が増えてくるにつれ、自然に「なんだ、千葉っていいところじゃないか」と思えるようになっていた。

もちろん日本国内と海外の赴任地を一緒に考えることはできない。それでも、「ロンドンだって住めば都」。できるだけ早くそう思えるようになるにはどうすればいいか。懸命に考えた。



たどり着いた方法のひとつが、自分の家やオフィスの周辺からはじめて、ロンドン市内をできるだけ歩き回ることだった。スマートフォンの地図アプリという便利な代物もあるが、日本で車を運転するときはナビに頼らず、道路地図を広げて抜け道を探すのが好きだった。ピカデリー・サーカスの本屋に入ったときに見つけた地図本「LONDON AZ」とにらめっこしながら、とにかく歩くことにした。



それは、ことばの不自由さを補うためでもあった。ロンドンに暮らす人びととうまくコミュニケーションがとれなければ、知り合いも増えないし、取材にも差し支えが出る。意思疎通する力をつけるのは当然、自分に課せられた課題だが、一朝一夕には成就しない。街を歩けば、なにかしらの発見がある。建物、看板、記念碑、銅像、道、川、橋、店、教会----などなど。行き当たったこれら諸々の役割やいわれは、その場でわかることもあるし、なんだかわからないままにオフィスに戻り、インターネットを検索しているうちに来歴を知ることもある。それを繰り返していくうちに、きっと記事にすべき題材を見つけられるだろう。そう考えた。

日々発生する大量のニュースを一つひとつ追いかけるポジションにいないことは、幸いだった。英国と欧州で起こっている政治・経済・社会に関する事象

を一步引いて眺め、それを咀嚼しつつ時折コラムを書くのが課せられた仕事だった。

ロンドンで勤務するオフィスはフリート街からさほど離れていないビルのワンフロアにある。その通りの名は、子供の頃、なにかで読んで見知っていた。新聞社が集まる一角だということも、なんとなく覚えていた。おそらくシャーロック・ホームズの子供向けの翻訳本だったのではないか。

ところが、フリート街を歩いても新聞社の看板に行き当たることはほとんどない。ほんのたまに「TIMES」「DAILY」など、新聞の題字を思わせる看板を掲げたビルがあるが、そのどれもが廃れている。どうやら、フリート街はかつての新聞街だったようだ。



そういえば、東京はかつて有楽町界隈に朝日、毎日、読売の三大新聞社が集中していたが、いまはそのどれもが移転してしまった。いまは JR 有楽町駅に隣接する「朝日ホール」「読売ホール」などに、かすかにその名残を留めるだけだ。

英有力紙のひとつ「ガーディアン」の看板はキングス・クロス駅近くの再開発地で見かけたし、日本経済新聞と同じグループになることが決まった「ファイナンシャル・タイムズ」が間借りしているビルは、テムズ川の南側に望める。果たして、フリート街に新聞社街の名残りを留めるものは残っているのだろうか。

ある晴れた日のお昼どき、「ランチタイム・コンサート、フリー」と書かれた看板に惹かれ、フリート街から一步入った教会に足を踏み入れた。演者はたまたま日本人の女性ピアニストだった。受付でプログラムをもらい、彼女が弾く数曲に聴き入った。同じように耳を傾けている人は十数人ほど。ささやかなコンサートだった。

アンコールの一曲を終えた後、聴衆のほとんどは帰ってしまったが、この教会のベンチの並べ方が型破りなことに気づいたわたしは、祭壇のほうに歩いて行った。通常、教会のベンチは祭壇と対峙している。ところがこの教会は祭壇に向かって左右両方向から中央方向へ向かい合って並べられていた。その一つひとつにプレートがはめられている。よく見ると、世界中の新聞社や放送局の名前、あるいは著名なジャーナリストの名が刻まれている。



祭壇の脇には、額に入った何枚ものホートレートが並べられていた。それは、戦場で殉死したジャーナリストの遺影だった。

そう、このセント・ブライズ教会はジャーナリストの教会だった。アジアの片隅で日本語の記事を書いてきたわたしは、ましてクリスチャンでもない。それでも、この教会との出会いは、因縁めいていた。

なぜジャーナリストを追悼しているのか、その答えは毎週火曜の午後に行われている教会ツアーに参加すれば見えてくる。

無闇矢鱈であっても、どんどんと歩いていけば、なにかに行き当たる。この繰試行錯誤が、わたしをだんだんとロンドン好きにしてくれている。



俳句について

クーパー 矩子

俳句に興味をもたれる方がふえていると聞き、私の学んだところをお話しようと思います。俳句は日本語のできる方なら、男女年令を問わず紙とペンさえあればすぐに始められます。約束ごととして、五、七、五の十七文字におさめる。季語又は季題を入れることがあります。歳時記や季寄せを手に入れますと、季語についていろいろとお分かりになれるでしょう。物事を文章にすると何行にもわたってしまいますが、俳句はたった一行十七文字におさめるという最も短い詩といえるでしょう。



私達をとりまく自然、日々の生活の中で心にとまった物や事柄、ひいては自分の思いを俳句によみこむことができるのです。日常生活で使う言葉は限られていますので、俳句を始めると日本語にはいかに多くの言葉や云いまわしがあるのに気付かされます。そこで自分の云いあらわしたい言葉をみつけたら、辞書で確かめる。自分の句ができたならそれを書き記す。できた句を声に出して読んでみて、なめらかによみ下せるかどうか、これらのどの作業も脳を刺激します。ボケ防止に役立つと云われる所以です。

俳句を続けていきますと次第に自分の使える言葉がふえて行き、会話も変化に富んでいくことでしょう。日頃みすごしていたいろいろな物事に対して、新しい見方があらわれて感覚が鋭くなっていくとも云えます。私達は折にふれものにふれ何かを求め何かを云いたいのです。美しいものに出会ったら言葉に出してほめ、人にも告げたくくなります。わき出した思いが俳句として作られれば暮らしに張りがでてきます。口下手な私がここ迄お話できたのも俳句を続けてきたおかげかもしれません。

自分も俳句をやってみようと思われたら、それがスタートですので一句をまとめあげた充実感を御自分のものになすって下さい。

秋詠十句

クーパー 矩子

読みつかれくつろぐ窓に遠花火
願いつつできぬ帰郷や巴里祭
意志強き汝をたのみに土用入り
待つことの喜怒哀楽や六月尽
六月のもどかしきかな我が無力

秋意かな友の逝去と聞きしより
秋冷やおのずと発句できており
四十年かくもつれ添い中の秋
秋気満つ駅に朗らかな立ち話

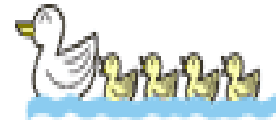


英国春秋俳壇

矢嶋恭子

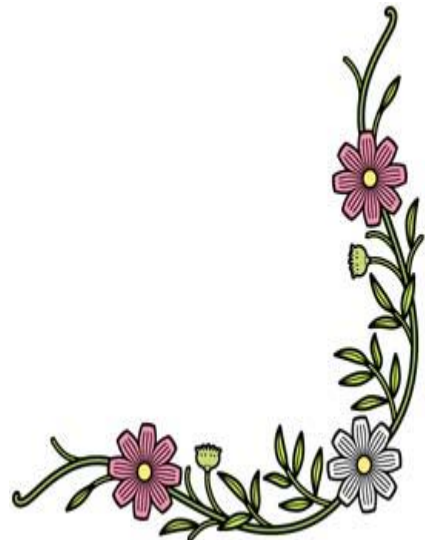
ヘザー咲く

ヘザー咲く ヨークシャーモアの 夏路かな
牧場に 鳴き声響く 羊の群れ
夏の日 川下りかな 鴨の群れ



思い馳せ 愉しみながら 打つメール
親友の 療養の報 夏寂し
月一度 最良の日が 続けばと

菜園の トマトの収穫 食卓に
真夏日も 日本食こそ 舌づつみ
看護師と 話す日本語 弾みたり
人踏まれ 振り返り見る 夏夜かな



仏像の魅力

有地芽渥

ここ数年の日本は「仏像ブーム」とかで、年配の方々だけではなく若い人も仏像をみることを目的に旅行する人が増えていると聞きました。仏像が好きな若い女性は「仏女」、仏像が好きな友達同士は「仏友」なる言葉すらあるそうです。英国にお住まいの皆様は普段はあまり仏教美術に接する機会がないと思いますが、日本に一時帰国された折などに奈良、京都のお寺巡りで故郷日本の真髄に触れてみてはいかがでしょうか？旅行の時間はない方でも、東京国立博物館を訪れば、奈良、平安、鎌倉時代の名作に出会うことができますし、ロンドンでも大英博物館の日本ギャラリーで数点の仏像を見ることができます。

美術館の場合は説明がついていますが、お寺に行ってもお像が沢山並んでいるだけで、何か良くわからないという声も時々あります。一神教のキリスト教の美術ですら、キリスト、マリアを筆頭に数多くの聖人や聖書に出てくる人物が登場しますが、多神教である仏教の場合は更に複雑です。タイなどで信仰されている小乗仏教の場合はお釈迦様のみを拝みますが、日本へ伝来した大乘仏教では如来、菩薩、天と仏教世界の構造がピラミッド式に広がっています。密教系になると元はインドのヒンズー教の神々まで吸収されて、多面多臂の憤怒像のように、穏やかで慈悲深い仏像とは全くかけ離れた像も出てきます。仏像の世界はこうした膨大な数の尊像で構成されていますが、そのピラミッド型の頂点に位置しているのが仏陀（如来）の世界です。

仏陀というと、まずは紀元前5世紀ごろインドで仏教を確立させたお釈迦様が思い浮かびますが、大乘仏教の思想ではお釈迦様は宇宙に数知れず存在する仏陀の中の一人にすぎません。全ての信者が死後に成仏するのが仏教の理想ですから、仏陀の像はお釈迦様の他にも数多く作られました。中でも日本で最も多く信仰を集めたのは、病を癒す薬師如来と西方浄土の阿弥陀如来でした。

仏像の中でも仏陀の像は、頭上にコブの様な肉髻（につけい）、額中央に白毫（びやくごう）というその独特な図像から誰でもすぐに見分けることができます。この独特な肉体的特長は仏典に記されている仏の三十二相の内の2点で、その他にも長く垂れ下がった耳たぶ、首にはっきり印されている三本の横線、かたつむり状のちじれ毛などがすぐに目につく特徴です。



(図1)

では時代別に日本で最も有名な3点の国宝ご紹介して、各時代の様式の特徴を考えてみましょう。日本に仏教が伝来したのは6世紀半ばごろと日本書紀に記されていますが、聖徳太子をはじめ皇室の仏教支持により7世紀初頭にはすでに飛鳥の斑鳩に立派な寺院も建立されて、洗練された金銅仏が日本で制作されるようになります。その中でも一番有名なのが、現在法隆寺の金堂に安置されている釈迦三尊像です。(図1) 座高約90センチ、台座と光背も入れると約3メートルにもなるこの像は、623年の銘が背後に記されており、止利仏師によって聖徳太子の霊を祀るために制作されたとされています。

中央のお釈迦様は細面に少し吊り上がったアーモンド形の目、口には優しい微笑みを浮かべ、両肩を覆う中国風の衣は裾が台座の下まで大きく波のような曲線を描いて広がっています。像は正面から拝むことを前提に作られたので、裏面は省略されて厚みはありません。右手の平を正面に向ける印は、施無畏印（せむいん）というジェスチャーで、畏れはなしの意味、左手の印は与願印（よがんいん）で字のごとく願いを与えるという意味です。

両脇に菩薩を従え、背後には先のとがった舟型の光背に小さい七体の仏陀が唐草模様の上に見えます。このような仏陀の明るい表情や舟型光背、正面性や様式化された衣の表現などの特徴は中国北魏の時代（386－534）の仏像のスタイルに倣ったものであることが、中国龍門の石窟彫刻を見ると良くわかります。飛鳥時代の仏教美術は北魏の様式が、長い時間をかけて朝鮮半島を経て日本に入ってきたため、中国本土ではすでに古式となっていたスタイルが用いられていたのです。

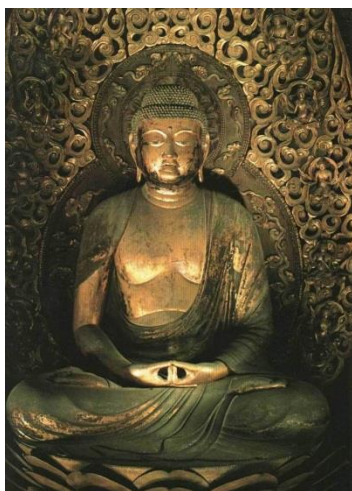
この北魏様式は7世紀後半になると、中国大陸との直通航路の発達によってもたらされた唐様式にと変容して行きます。この最新流行の様式を代表する名作が現在も奈良の薬師寺金銅に安置されている薬師三尊像です。（図2）



（図2）

中央の薬師如来坐像は2.5メートル、脇侍の日光・月光菩薩立像は3メートルを超えるこの立派な三尊は天武9年（680年）に天武天皇が皇后（後の持統天皇）の眼病平癒のために発願して、天武天皇没後に持統、文武天皇が造営を引き継ぎ文武2年（698年）ごろに完成した技術的にも芸術的にも素晴らしい銅像です。本尊の威厳に満ちた薬師如来坐像は、均整のとれた体軀にふくよかな頬、身にまとう衣はインド風に左肩を覆い、薄い布のひだが写実的に表現されています。法隆寺の釈迦三尊と比べると、その立体感は驚くばかりです。黒光りする銅の色は、当時の日本の合金技術には亜鉛が多く含まれていたためだそうです。手の平を上に向けた左手には、病を癒す薬壺を乗せていたはずですが、現在は失われてしまっています。

両脇に立つ日光・月光菩薩はインドのドティと呼ばれる腰巻風のスカート、上半身は裸で、胸には豪華な首飾りが表されています。僧侶のシンプルな衣姿の如来とは対照的な菩薩の着飾った姿は、衆生を救うためにこの世に残って働く菩薩という存在を象徴しています。体重を片足にかけて、くびれた腰を少しひねり、頭をわずかに傾けた動きのあるポーズは、インドのグプタ朝や中国の唐時代の彫刻にもみられる特徴で、7世紀末から8世紀にかけてこのスタイルがアジアの広範囲で流行したことがわかります。そんな昔にもシルクロードや海路を経て、商業のみならず文化の国際交流が盛んに行われていたことは、正倉院に残る数々の貴重な美術品が示していますが、仏像制作の技術やスタイルを日本の職人が素早く学んで、この薬師三尊のような洗練された名作を7世紀末に制作したことは改めて驚きます。



（図3）

森林に恵まれた日本では彫刻に最適なヒノキやクスが豊富にあることから、平安時代になると、それまでの金銅仏、漆乾漆像や粘土で作った塑像にかわって、木造の仏像が主体になります。初めは一木作りの手法で一本の木の幹から立像を彫りだしていましたが、徐々に工夫がなされていくつもの木片を組み合わせて一体の像を制作する寄木造りの技法が発達してきます。この寄木造りを理想的な段階まで完成させた仏師が、宇治の平等院鳳凰堂の本尊阿弥陀如来の製作者、定朝です。（図3）

寄木造りは前後左右を別の木片でつくるため、仏像がひび割れたりすることもなく、手足の動きのあるポーズも可能、大きさも一本の木に制限されません。中を繰り抜いてあるので大きさの割には軽しい、大勢の職人が共同で一体の像をつくるのため時間もかかりません。破損した時には、壊れた部分だけ取り換えればよいと、長点ばかり備えていますから、11世紀以降の日本

の仏像はほとんどが寄木造りとなります。

鳳凰堂の阿弥陀如来は和様と称される純日本風の仏像です。丸顔で穏やかな表情の阿弥陀如来は伏し目がちで、小さな口からは微笑みは消えて、静かな気高い雰囲気を感じさせます。この像に見られる純日本風美意識の誕生は、平安後期の優雅な藤原文化の特徴ともいえます。10 世紀初めに唐が崩壊した後中国との国交は途絶えて、日本はかな文字の発展にともない和歌ややまと絵の開花、11 世紀初頭には源氏物語や枕草子に代表される雅やかな平安貴族文化の全盛期を迎えます。表面では豪華絢爛な貴族世界ですが、「もののあわれ」といった言葉にも表れているように、貴族たちは季節の移り変わりに人間の命のあなさを重ね、仏教の輪廻や因果の思想に翻弄されて生きていました。



(図 4)

宇治の平等院は 11 世紀半ばに時の関白、藤原頼道がその父、藤原道長の死後に父の西方浄土往生を祈願して、それまで避暑の地にあった別荘を 1052 年に仏教寺院に改装したといわれています。(図 4) 日本人は誰でも 10 円コインでお馴染みの鳳凰堂の建物が建立されたこの 1052 年は、仏教では末法の世の始まりとされており、仏の教えは衰退して世は混乱し、悟りを得るの

は不可能になると信じられていました。その腐敗した末法の時代に人々を死後に救ってくれるのは、慈悲深い阿弥陀如来のみ。死を迎えた時に「南無阿弥陀仏」と唱えれば必ず西方浄土へ行かれるという教えは、日本中に広まっています。平安時代には貴族が中心であった阿弥陀信仰が、鎌倉時代には法然上人の浄土宗、親鸞上人の浄土真宗、一遍上人の時宗といったいわゆる鎌倉新仏教の誕生によって、社会の隅々にまで浸透していったのです。

その鎌倉時代に造像された阿弥陀如来立像の一つが現在、大英博物館にあります。(図 5) 高さは 1 メートルほどの小像ですが、均整のとれた完成度の高い寄木造りで、眼は玉眼がはめ込まれています。薄いクリスタルを眼の後ろからはめ込み、瞳を書き入れる玉眼の技法は鎌倉時代に発明され、運慶、湛慶に代表される慶派の写実的彫刻の特徴となりました。薄暗い寺院の室内でチラチラとするロウソクの光を反射する仏像の眼は、当時の人々にとって生身のように感じられたのでしょう。穏やかで理知的なこの阿弥陀如来の面持ちは、鎌倉時代の日本の仏像の特徴を良くとらえていますので、是非一度大英博物館の日本ギャラリーへ足を運んでください。



(図 5)

- 図 1 . 釈迦三尊、623、金銅、法隆寺、奈良
- 図 2 : 薬師三尊、698、金銅、薬師寺、奈良
- 図 3 : 阿弥陀如来坐像、1053、ヒノキ材に金箔、平等院鳳凰堂
- 図 4 : 鳳凰堂、宇治平等院、1052
- 図 5 : 阿弥陀如来立像、鎌倉時代、大英博物館(Trustee of the British Museum)

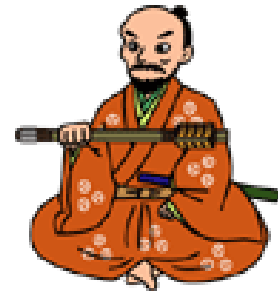


まぼろし
「夢幻のごとくなり」

加藤節雄

「人生50年、夢幻のごとくなり」とは、織田信長が出陣の際に好んで舞った謡曲の一説だと言われている。人が生まれてから精一杯生きられるのはせいぜい50年ぐらいのものであり、それも夢のようにはかなく過ぎ去ってしまうものであると解釈されるが、真の意味は、50年しかないのだからいい加減な生き方をせず、しっかり頑張りなさい。そうしないと後に悔いを残すことになるという教訓が秘められているようである。

その信長も明智光秀の謀反により京都本能寺で自害を遂げ、48歳の人生に幕を閉じた。彼の人生観の50歳まで生きることなく、本人は大いに悔やんだに違いない。その信長没後430年余、今日の日本人の平均余命は男女とも80歳以上である。「人生80年、夢幻のごとくなり」と書き変えなくてはならないほど、日本人の寿命は飛躍的に延びた。



我が身を振り返ってみると、50歳の時に一つの転機があった様に思う。それまでは現役のフォト・ジャーナリストとして、イギリス国内のみならずヨーロッパからアメリカにまで足を伸ばし、取材に駆け回っていたのだが、50歳を転機に日本のメディアへの仕事を辞め、ロンドンで自分の新聞「日英タイムズ」を創刊した。別に織田信長に触発されて、「夢幻のごとくなり」とばかりに、残りの人生を別のことに使おうと思ったわけではない。ただカメラバッグを担いで走り回るのに疲れたのと、もう少しロンドンで落ち着いて仕事をしたいという希望があったからだ。



その「日英タイムズ」も日本経済の凋落に伴い、広告収入が減り財政的に難しくなり10年余で休刊となった。その後は現在まで日本クラブ会報の編集を務め、それまでに培ったノウハウや人脈を使って数々のボランティア活動に力を注いできた。自分の人生を振り返ってみると、何やらやたらと忙しく、とにかく種々雑多な仕事をこなしてきたということに尽きるような気がする。

私は大学を出てからの数年間通信社勤務をただけで、後はずっとフリーランスのフォト・ジャーナリストを続けてきた。「フリーランスは上から言われたことをするわけではなく、自分の好きな仕事を選ぶのでいいですね」と良く言われる。ところが現実には正反対で、食べるためにはありとあらゆる仕事をこなさなければならないし、一度断るとその雑誌社からはもう仕事は来ない。フリーとは言いながらちっともフリーではないのが実態だ。

それでも「自分の好きなことをやってきたのではないか」と言われれば、確かにそうだ。それなら人生に悔いはないかと言われると、全く逆でいつも悔いばかり残る。世の中に悔いのない人生を送った人なんているのだろうか。自分の人生を振り返る時、そこにあるのは悔悟と失望感という人が多いのではないだろうか。信長時代よりも人は30年も長生きになったかも知れないが、「夢幻のごとくなり」は今でも通用する様である。



私の履歴書

宇山秀樹



今年6月末に日本大使館の総領事（総括公使兼任）としてロンドンに着任し、ほぼ3ヶ月が経ちました。「英国春秋」に「私の履歴書」というテーマでものを書くよう依頼をいただいたとき、「私の履歴書」と言えば日経新聞に政治家や財界人といった功成り名を遂げた偉い人が書くものというイメージがあるだけに、一寸気後れしていました。しかし、この度英国日本人会の名誉会長をお引き受けする榮譽に浴したこともあり、私のことを会員の皆様にこういう形で知っていただくのも一興だろうと思い、自分の半生を簡単にご紹介してみる気になりました。

1 鳥取生まれの東京育ち

私は1962年鳥取県倉吉市で生まれました。2歳のころ、地元の信用金庫で働いていた父が一念発起し税理士資格を取るために上京することになり、両親に連れられ東京に出てきました。父が下積みを経て税理士として独立し事務所の経営が軌道に乗るまでの10数年間、暮らし向きは楽ではありませんでしたが、母は儉約に儉約を重ねながら、私と5歳下の弟の教育を優先してくれました。私の今日あるはそのおかげと、両親には感謝しています。

物心ついてからはずっと東京で育ったため、私は鳥取弁もしゃべれませんが、小・中学生の間は毎年夏休みに家族で帰郷し、豊かな自然の中で過ごしていたので、生まれ故郷としての鳥取への愛着と誇りは今も持っています。先日、ヘンドン日本人墓地のお盆の清掃・法要の際、英国で亡くなった同胞の方々のリストを見ていたら、リストの最初に大正年間に若くして亡くなった鳥取県出身者の名があり、感慨深いものがありました。

2 初志貫徹への道 — 「遠回り」も人生の財産

私には、幼い頃から将来は外交官という夢がありました。私が4歳のときに両親に宛てて書いた手紙(?)を母が大事に保管しており、見せてもらったことがあります。そこには「5さいになったらがいこうかんになってあげます」と書いてありました。勿論、4歳の子供に外交官の何たるかが分かるはずありませんが、母が鳥取県出身の澤田廉三初代国連大使（夫人はエリザベス・サンダースホーム創設者として有名）の話をしてくれたのを、幼心に何て大事な仕事なんだろうと思ったようです。

具体的に目的意識を持ったのは高校生のときです。北方領土問題に関する本を読んで、祖国の領土がソ連に不法占拠されている事実には憤慨し、将来外務省に入ってソ連を相手に日本の国益を守る仕事をしたいという思いを強く持つようになりました。一浪して東京大学に入学したときには、第二外国語としてロシア語を選択しました。

しかし現実はその生易しくはありません。学校の勉強はそれなりにできたとはいえ、ドメスティックな環境に育ち、海外との接点は皆無。元々さほど社交的な性格でもありません。大学4年のとき外交官試験に落ち、1年留年して1986年の夏再挑戦しましたが、今度は二次試験で落ちました。深い挫折感を味わいましたが、さすがにこれ以上親の脛をかじるわけにはいかないと思い、外務省を諦めて新日本製鐵に入社することを決めました。

1987年4月に入社、その1週間後、新入社員はみな全国に7カ所あった製鉄所のいずれかに配属され、製鉄の現場で三交代制に組み込まれて1ヶ月半ほど研修することになります。私は八幡製鉄所でした。私の役目は、ぐらぐら煮えた銑鉄の入った巨大な鍋の中に、6mくらい上から靱殻の入った大きな袋をいくつか投げ込むことでした。これは、次の工程に行くまでに液状の銑鉄の表面がなるべく空気に触れないよう靱殻の灰で膜を作るためでしたが、千数百度に煮え立っている鉄の熱が上がってくるので、耐熱服とヘルメットに耐熱マスクを身に付けていても、熱くて仕方がありません。また、慣れない夜勤シ

フトのときは、仕事を終え朝寮に帰り着くとバタッと眠り、起きるとすぐ出勤という生活でした。しかし人的環境が良かったので、精神的な辛さはありませんでした。工長さんたちは右も左も分からない新人を仲間として温かく扱ってくれました。当時の鉄鋼業界は円高不況のさなかで、日本の鉄鋼業発祥の地・八幡でも2基あった高炉の内1基を稼働停止しなければならない状況でしたが、現場の人々の士気は高く、誇りを持って仕事をしていました。

そういう中、私は重大な決意をしていました。入社する直前、このまま幼い頃からの夢を諦めてしまっているのだろうかとの疑問が頭をもたげ、会社で働きながらもう一度だけ外交官試験に挑戦してみよう、それでも失敗したら悔いなくこの会社で働いていこう、と思いつめました。八幡の独身寮では6畳一間に2人の生活でプライバシーはなく（同室



のA君は実に面白い人間で、楽しかったですが）、夜勤を含む現場研修、また研修終了後は製鉄所経理部での勤務をする中、勉強できる時間は著しく限られていました。睡眠時間を削り、休日には小倉に出て、図書館にこもって必死で勉強しました。ある日、A君が「お前、もしかしてもう1回外交官試験を受けるつもりか」と言うので、「実はそうだ。会社には隠れて勉強しているから、お前限りにしてくれ」と打ち明けたところ、彼は「そうか。俺はお前が夢を叶えられるよう全面的にサポートする。他のやつには絶対言わない」と言ってくれました。

仕事と試験勉強の二重生活に耐え、3度目の挑戦の結果、その年の9月、外務省から合格の通知が届きました。会社の先輩やA君以外の同僚たちは大変驚き、一部の上司からは「お前そんなことやってたのか」と怒られましたが、10月に退職して北九州を去るときには皆温かく見送ってくれ、駅で涙の別れをしたことを昨日の事のように思い出します。

このような経緯から、大学からストレートで入省した外務省同期の連中より私は3つ歳をくっているのですが、この「遠回り」の経験は、私の人生にとって無駄ではなく、むしろ得がたい財産になっています。短期間で退職した新日鐵には迷惑をかけましたが、日本の底力は製造業にありということを実感し、また経理部勤務でコスト感覚を身に付けたことは、現在の役人生活においても常識的なバランス感覚を保つ原点になっていると思います。今や新日鐵住金の重職に就いているA君をはじめ同期入社の何人かは今でも大切な友人です。

3 対ロシア外交に苦闘

外務省に入るまでの話が長くなりました。端折って書いていくことにしましょう。

1988年4月に外務省に入省し、研修語学は第1希望のロシア語になりました。モスクワには、ソ連崩壊直前の1991年9月に到着して以来、これまで3回（1991-94、2003-05、2010-12）、計7年弱滞在しました。モスクワ以外には、2001-03年ポーランドのワルシャワに在勤しました。

1990年代前半の動乱期のロシアを目撃したことは興味深い経験でしたし、初めて家族3人一緒（当時娘は1歳でした）の海外生活となったワルシャワは、史上初の天皇・皇后両陛下御訪問（2002年7月）に携わったこともあり、大変思い出深い地ですが、1つ1つ書いていくと切りがないので、詳細は別の機会に譲ります。ただ1つだけ、あまり知られていませんが、ポーランドは日露戦争で日本が勝利して以来の大変な親日国であることは皆さんに知っておいていただきたいと思います。

2005年に2度目のモスクワ勤務を終えて帰国した後、東京では管理職を3ポスト（欧州局中央アジア・ユーカサス室長、国際協力局国別開発協力第二課長、第四国際情報官）務め、史上初の総理の中央アジア訪問を手がけたり、ODA、インテリジェンスなど幅広い経験を積ませてもらいました。

2010年8月からは3度目のモスクワ勤務で、政務担当の公使を務めました。着任早々、メドヴェージェフ大統領（当時）の国後島訪問という事件が起き、日露関係の雰囲気はつるべ落としのように悪化していきました。翌年3月11日の東日本大震災直後にロシ

アが日本に一定の支援をし、日本側も関係改善に努力したため、多少雰囲気改善が見られたものの、2012年7月にまたメドヴェージェフ（そのときは首相）が北方領土を訪問するなど、日露関係はぎくしゃくしていたので、精神的にしんどい2年間でした。一方で、ロシア内政は2011年12月の議会選挙不正をめぐって反プーチン運動が盛り上がりを見せ、私も政権側・反政権側それぞれの様々な関係者と接触して情報収集に努めていました。ある日、私が某反政権派指導者の一人と昼食を取りながら話をしている模様がTV番組で放映されました。明らかに盗聴・盗撮です。反政権派のリーダーたちを祖国への裏切者として糾弾・中傷する番組で、彼らが西側諸国の外交官と接触して売国行為をしているかのようなプロパガンダの材料に使われたのです。正常な外交活動の一環としての情報収集であり、私には何ら恥じることはありませんが、ロシアが相も変わらぬ謀報大国であることを身を以て実感しました。



2012年9月に帰国すると、今度は欧州局ロシア課長を拝命しました。自分がこのポストに就くことになるとは予想していませんでしたが、期せずして、高校生のときに志した北方領土問題を含む対露外交の中核に入ることになったのです。責任の重さに身が引き締まる思いでした。

幸運だったのは、その時期まだ民主党政権でしたが、玄葉外務大臣（当時）はじめ日本側の努力とロシア側の一定の歩み寄りもあり、日露関係が徐々に改善するタイミングに当たったことです。そしてその年の12月、総選挙の結果自民党が政権に返り咲き、安倍総理及び岸田外務大臣の下で日露関係を本格的に進めていく雰囲気が醸成されていきました。

2013年4月には安倍総理の訪露が実現。小泉総理の訪露以来10年ぶりの総理の公式訪露として、意義の大きな訪問でした。準備過程でのロシア側との交渉は難航を極め、訪問直前10日間ほどはほぼ徹夜の毎日でしたが、首脳間の共同声明をぎりぎりのタイミングでまとめることができました。この訪露から数えて10ヶ月足らずの間に、安倍総理とプーチン大統領は5回の会談を重ね、その間に史上初の日露「2+2」（外務・防衛閣僚会合）や日露次官級協議をはじめ、日露間のあらゆる対話が活発化しました。言うまでもなく、平和条約締結交渉、即ち北方領土問題をめぐる交渉は、双方の立場が真っ向から対立しており、容易に動くものではありませんが、私たちは、日露関係全体を発展させていく中で、領土問題の打開を図っていく戦略を描いていました。

ところが、2014年2月ウクライナ危機が勃発し、ロシアがクリミアを併合したため、日露関係も暗転しました。日本として、国際秩序を力で踏みつけたロシアに対する厳しい姿勢を堅持しつつ、日露間の対話を絶やさないようにするという両立困難なミッションを負って、私はその後の1年3ヶ月苦闘することになりました。管理職なので超勤手当は一切付きませんが、ウクライナ東部情勢の悪化への対応のため、土日出勤も含めて月200時間ほど超勤していた時期もありました。

日露関係が再び困難な局面に陥ったことは残念ですが、昔からロシアは一筋縄では行かない国であり、日露関係にも浮き沈みがあるのは仕方ありません。私は3年弱のロシア課長としての任期を精一杯務め、優秀な後輩にあとを託して、家族と共に念願の英国に赴任してきました。

4 英国との縁、そして三度の飯より好きなもの

実は私、英国に住むのは2度目です。もう25～26年も前のことですが、当時はまだ冷戦期で、日本外務省のロシア語研修員は、まず英国か米国でロシア語を学んでからソ連に行く習わしでした。私は英国軍の語学学校でロシア語を学んだのですが、豊かな歴史ある英国がすっかり気に入って、いつか在勤することを望んでいました。小学生時代を英国の現地校で過ごした妻も、再び英国に住んで仲の良かった英国人の友達と再会することを夢見ていました。今回縁あって、家族3人でロンドンで生活することになったことを、高校生になったばかりの一人娘共々喜んでます。

最後にオタク的で恐縮ですが、趣味の話少々。私はクラシック鑑賞が三度の飯より好きで、大学生の頃は家庭教師のバイトで貯めた金をほとんどLP（当時CDは出始めた頃で非常に高価でした）に注ぎ込んでいましたが、音楽を生で聴く喜びに目覚めたのは25年前のロンドンにおいてです。

クラシックなら大抵の曲を聴きますし、オペラやバレエも好きですが、特にマーラーの交響曲にはまっています。幸運なことに、私が最初に英国に住んでいた1989年から91年の間、テンシュテット、ショルティ、アバド、シノーポリ、コリン・デイビス、ハイティンクといった名指揮者たちがこぞってロンドンでマーラーを振っており、一年半くらいの間にマーラーの交響曲10曲を2サイクル聴く幸運に恵まれました。今も現役で活躍中のハイティンクを除き、これらの巨匠たちは皆この世を去ってしまいましたので、圧倒的迫力に感動したテンシュテットのマーラー8番など、あのとき聞いておいて良かったとつくづく思います。今回2度目のロンドン生活においても、仕事の合間を見てはコンサート通いを始めています。英国日本人会に同好の士がおられれば、音楽談義でもしたいものです。



外務省の人事の常で、私たちがロンドンに何年くらいいることになるのか全く予測がつかませんが、少しでも英国日本人会はじめ当地日本人コミュニティのお役に立てるよう心がけて考えていますので、どうぞよろしくお願いします。



Life is Fun

古沢 いくこ

貴男のベストフレンドのアランから嬉しい電話がありましたよ。Wisley Golf Club の Super Senior の優勝カップに貴男の名前がついたそうですよ。”Furuzawa Yuko Cup”と彫られました。私はゆう子という女の子の名前と間違われるかもしれないので Friendship にしたらどうですかと申し上げたのですが、日本語にするのがとても大切なのだとおっしゃるのです。日本人の Furuzawa と色んな国籍のメンバーとの友好の証のカップなのだから日本語にしたい、でも皆が読める様に、Yuko とするのがこの際一番だとおっしゃいました。メンバーの方達と色々と話し合い決めて下さったそうです。



コースのそばに記念樹の日本のもみじを植えて下さいました。もみじは私が真っ赤に成るのを選びました。すでに3メートル位の高さのある木ですよ。木の下には”Mitch Furuzawa Memorial Tree”と書いてあります。素晴らしいロケーションですよ。前に池があり、その真ん中に噴水が上がっているでしょ。池のつずきが Putting Green だから貴男はプレイしている人達の Putting が見られるわ。

あれも、これもみんなアランの熱心さと、根気のある力添えのお陰だと思います。

貴男は人生を思う存分楽しんだ。Life is fun と貴男は言うてましたね。ビンテージのベントリーにハンチングを被って颯爽と乗り、アストン・マーチンで吹っ飛ばし、最後がジャガーのスポーツカーでしたね。自分だけでなく周りの人達を喜ばせるのが好きで、皆に気っぷのいい人だと言われていましたね。49年の結婚生活、貴男は色んなものを私に残してくれた、中でも4人の子供と7人の孫。これからも何処にいても私を守って下さいね。

我が郷里と友への手紙

渡邊道英 (旧姓越智道英)

◆巡礼の旅『四国八十八ヶ所巡り』

第51番札所『石手寺』は愛媛県の県庁所在地松山市の「道後温泉」から目と鼻の先にある、子供の頃から両親に連れられて度々訪れた名刹です。この石手寺は私ども祖先が寄進造営した寺として教えられてきました。「石手寺」を訪れた人はご存知と思われますが社務所に張り巡らせた幔幕に染め抜かれた家紋がまさしく私ども越智家の家紋と同じで「河野水軍」「村上水軍」の家紋も同様です。



「四国八十八ヶ所巡り」は、金剛杖を手に1400キロメートルをひたすら歩く旅。土地の人から受ける”お接待”が心にしみる。人は何故四国を目指すのだろうか? この文章は岩波新書『四国遍路』(辰野和男著)の紹介に書かれたものです。辰野さんは70歳にして”歩き遍路”を完遂され、その時のことを中心に執筆されたエッセイですが、私の座右の名著の一冊です。

「空海」「弘法大師」「お大師さん」と呼び名も三通りありますが、子供の頃はたいがい親しみを込めて「お大師さん」と呼ぶのが習わしでした。我が家は屋号を『タケワラ屋』と言って近在の越智家の”母屋”とか”本家”となっていたようです。毎年「伊勢講」の集いがあり、代表が伊勢神宮に参内していましたが選ばれた人たちを送り出す前と帰ってきた時には盛大なる宴会が開かれました。子供の頃から父親の膝の上で「伊勢音頭」「伊勢甚句」などを聞いて育ちました。

ともあれ、愛媛県の松山市と今治市を結ぶ県道53号線の間にある越智郡菊間町が郷里であり、現在も長兄が住んでいます。自宅の前を走る県道は数千年前から「伊予路」としてお遍路さんたちの幹線道路となっています。

瀬戸内の春の海は本当に穏やかでした。私の小中学校まで1kmくらいありましたが、早朝から白装束のお遍路さんに出会いました。チリンチリンと鳴るお遍路さんの鈴の音に暖かい人のつながりを感じました。瀬戸内の秋の風景も格別印象深いものでした。春の海が霞がかかったまったりとした風景であるのに対して、秋のそれは澄み渡った空気に瀬戸に浮かぶ小島がくっきりと見えていました。

緑の中に「温州みかん」の黄色く色着いたみかん畑が島々に広がっていました。それら瀬戸に浮かぶ島々を背景にして、巨大な貨物船や観光船が行き交う眺めは私達少年たちの心を遠い外国に誘いました。

こうした田舎町から東京の大学に進学して以来、既に半世紀が経過しています。年老いて外国に長く住んでいますと殊更昔遊んだ郷里瀬戸内海の内原風景が鮮明に浮かんで来ます。1300年の昔から、瀬戸内海(殊に来島海峡)は遣唐使や朝鮮使節が通った海道(メイン航路)であって、河野水軍、村上水軍が活躍した頃に夢を馳せる今日この頃です。



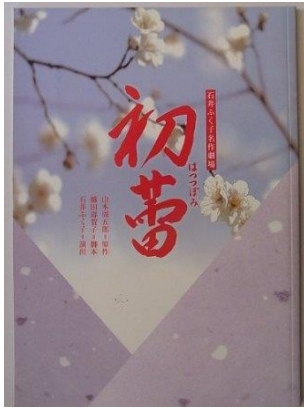
◆ロンドンから「学友、親友、親しい知人たちへの手紙」

●TBS 会長 鴨下信一様

師走の日々は何にも増して気ぜわしいものと、いにしへの昔より言われていたことですが、まさしくそんな毎日でございます。鴨下様には殊の外多忙を極めておられるものと拝察申し上げます。

さて、「森一生監督」の件で御社を訪問、貴重なひと時を会長室で過ごさせていただいたことが昨日のこのようです。それ以来大変長らくご無沙汰致してしまい心よりお詫びいたします。

さて、今夜(12月8日)は貴兄が演出された『初蕾』(山本周五郎生誕百年記念番組)を拝見させていただき深く感動いたしました。つついとお便りしたく不躰ながら感想などしたためてみました。最近TVドラマに失望し、あまり見ることはありませんでした。ところが鴨下信一様演出との情報を見て、手ぐすね引いてTVの前で待っていました。こ



んなにじっくり腰を据えてTVドラマを観たのは、数年ぶりのことでした。「山本周五郎」の小説は小生も愛読者の一人ですし、感動深い小説も沢山読んできましたが、この度の傑出した鴨下演出の出来栄えは見事で、深い感動が押し寄せてきました。今夜は当分眠れそうにありません。スコッチウイスキーを飲んで余韻にふけりたいと思います。

それにしましても、ドラマツルギー上、山本周五郎の小説は”善人の集まり”であり、善悪の対立や動と静の対比などの演出上の強弱がつきにくく、”事件もの”に慣らされた最近の視聴者にどのように受け止められたか?大変な関心を持っております。私の身近な親友たちが同じく、『初蕾』を観ていて『久しぶりに良いドラマを見た』と感動しきりでした。”ドラマの

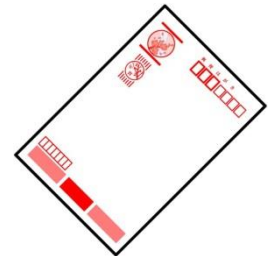
TBS”のキャッチフレーズが懐かしい昨今、石井ふくこプロデューサーと鴨下演出が復活か!とワクワク致しています。キャストイングも見事でした。宮沢りえの成長も嬉しいが、今回は若尾文子と宇津井健さんの良さが出ていて、素晴らしかったです。個人的にも大映時代の先輩方お二人の好演に胸が熱くなりました。

今後とも鴨下さんの演出家、プロデューサー、経営者としての広範囲なご活躍を心から祈念し、期待しております。(2003年12月)

●藤村志保 様

厳しい冬が続いていますが、お元気のご様子大変嬉しく思っております。本日『立春大吉』の時宜を得た明るいお葉書頂戴いたしました。

しばらくLondonに滞在していました関係で”今うらしま”状態にあり、皆様方の消息が判明しません。それでも田中徳三監督の訃報に接しショックを受けています。「2月2日のお別れの会」(関西学院大学構内)に出席したいと、一度は出席する旨連絡していたのですが、生憎喉風邪でダウンし、当日になってお断りする始末。誠にだらしの無い仕儀で申しわけなく思っています。『勝ちやんの七回忌法要』以来、旧大映京都撮影所の皆様方と再会できると心待ちにしていたのですが残念でなりません。



ところで田中徳三監督とは昨年の6月初めに数回電話連絡し、大映を辞して以来、互いに歩んだ道などお話しし、次回帰国した際再会する事を約束していました。積もる話をしたいと願っただけに誠に残念でなりません。ご冥福をお祈りするばかりです。

富士写真フイルムに再就職して以来、家族付き合いをして頂いていた『森一生監督』はじめ『大洲斉監督』『国原俊夫監督』そして殺陣師の『楠本栄』さんなどは葬儀、各法事にも極力列席、京都を訪ねました。

しかし、『宮川一夫先生』(世界的なカメラマン)はじめ『安田公義監督』『三隅研次監督』などは何方からも情報をいただかず、しばらくして知った次第。ただただご冥福をお祈りしただけでした。

今更ながら、一人また一人と鬼籍に入られた親しい皆様のことを思うと寂しくなっています。

しかしながら、志保さんはじめ中村玉緒さん、坪内ミキ子さん、江波杏子さん、さらには若尾文子さん、安田道代さんなど映画、TVで大活躍されている様子を拝見、とても嬉しく思っています。男優は寂しいですね、私の同期の平泉 成(征)君くらいですね。

ところで、つい最近ですが(ロンドンから帰国して間もなく)新宿区区役所に出向きましたが、坪内(ミキ子)さんにバッタリ会いました。互いに驚きしばしポカンとして見つめるばかりでした。ほんの少しだけたち話をして別れました。志保さんをご存知と思いま

すが、坪内さんのご主人は嘗ての大映本社宣伝部長の桜井さんです。数年前に大映OB会結成を発案し、私の同期助監督で徳間大映の山本洋(常務取締役)君などと会合を持っていました。新橋駅前ビルに本社を有する会社の社長室に桜井先輩を何度かお尋ねしました。未だに桜井さんは知人のオーナーさんの命を受け社長業をされているとのことでした。

最後になりますが、志保さんの舞台公演(日本舞踊も含め)など小生が拝見できる作品を教えてください。それではお健やかに過ごしてください。

早々

2008年2月5日

渡邊道英(旧姓越智道英) 拝

◎川崎勝盛・真衣子 様

お便りありがとうございます!二週間にわたる”ウインブルドンの祭典”も終わりましたね。男女ともに新しいチャンピオンが誕生しました。ゴルフなど他のスポーツ界も新風が吹いてきました。私は、目前に迫った「全英オープン GOLF」で、石川僚君はじめ世界の若い世代が優勝してくれることを期待しています。4日間サンドイッチの「S't・George GC」に観戦に出掛けます。貴方達は学会のためフローレンスに行かれている由、ご一緒できないことが残念です。しかし私の大好きなフローレンスに旅行されることが我が事のように嬉しいです。あのアルノ川と赤い瓦屋根の美しい景観、殊に《ミケランジェロ広場》から市街を一望した体験は終生忘れられません。ルネッサンス文化の集大成が織りなす古都だけに、見るべきものが一杯あります。しかし、一度や二度ではとても見切れません!従って最初は自由気ままに見るといいですね!ロンドンに帰ったら、第一印象を聞かせてください。楽しみにしています。



ところで過日お話した『HENLEY ROYAL REGATTA 2011』(6/28~7/2)の最終日に決勝レースを観る為、早朝からパディントン駅から Henrey-on-Thames まで出掛けました。ワンダフルでした。



今日まで英国が誇る各種イベントに参加してきましたが、あの世界が注目する競馬界の頂点にある『ダービー』さらに『ROYAL ASCOT』『THE OPEN(全英ゴルフオープン)』よりも凄いものでした。テムズ川沿いの美しい町でのイベントで、今年で150年(150回)を迎えた世界最大のボートレース大会でした。

た。英国の伝統的なスポーツと言えば「競馬」「乗馬」「ラグビー」「テニス」「クリケット」など沢山ありますが、現在まで”アマチュアスポーツ”のまま継続されているものは、この「boat レース」のみではないでしょうか!高校生どころ瀬戸内海でボートを漕いでいた私ですので、殊の外このスポーツには惹かれます。世界中から集まった名門の『Rowing Club』や『有名大学のボート部』の対決は爽やかで、”力強さと美しさ”を感じました。まさしくボートのオリンピックでした。そして、真夏を彩る一年に一回のこのイベントに参加する老若男女の華やかさは、まるで日本の春のお花見の如しでした。テムズ川の川堤に”花笠を敷いての酒盛り”まるで結婚式が始まるのではと錯覚するような正装姿の人人人、大きなテントで作った本日だけのレストラン、バー、クラブ。銀行関係の招待コーナーはシャンペンの乾杯で溢れかえっていました。関係者に尋ねたところ10万人は下らないとか!感動のあまり長い便りになりました。悪しからず!

2011年7月

渡邊道英(旧姓越智) 拝

英国春秋歌壇

古沢いくこ

お百度参り

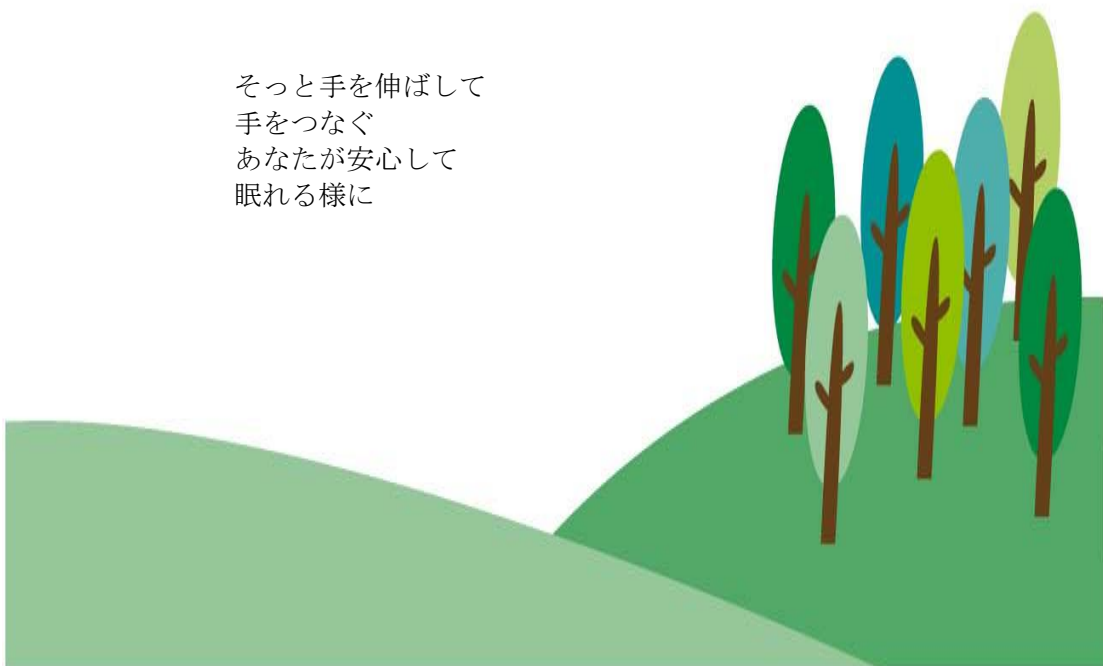
お百度参りをすると願いが適うという
愛しているわと百回言えば私の願いが適うだろうか
あの人はずっと私の傍に居てくれるだろうか
言葉には言霊があるという

クリスマス

いかないで外はまだまだ寒いから
クリスマスツリーの下で、2人でゆっくり踊りましょうか
“だいじょうぶよ 大丈夫 私が守って上げるから”
いかないで、春が来るまで行かないで、外はまだまだ寒いから

手

そっと手を伸ばして
手をつなぐ
あなたが安心して
眠れる様に



漱石のロンドンと赤い雛罌粟

中沢賢治



夏目漱石は1900年の夏から2年間のロンドン留学中に下宿を何度も変えている。ようやく落ち着いた5軒目の下宿と、その向かいにある漱石記念館は地下鉄ノーザン・ラインのクラパム・コモン駅の近くにある。訪ねてみると漱石に関する様々な資料が展示されていていくつもの発見があった。わたしは2度の駐在勤務でロンドンをよく知っているつもりだった。英国新潟県人会の集まりがメンバーのSさんの家で開かれた時にこのクラパム・コモン公園の横を通ったことがある。ヴィクトリア駅は長距離列車の出るターミナル駅なので何度も乗り降りしている。チェルシー橋はバタシー公園の脇にあるので何度も眺めたことがある。その公園で漱石が自転車の練習をしたこと、船旅で英国に上陸した漱石がヴィクトリア駅に降り立ったこと、チェルシーにあるカーライル博物館への途中で橋を渡っていたであろうことは知らなかった。

漱石の下宿からチェルシー橋まで歩いてみた。徒歩で20分ほどの距離だ。漱石が訪問記を書いたカーライル博物館は、西の方向に川沿いに10分ほど歩いたアルバート橋のたもとにある。チェルシーはテムズ川の北岸にあり、ロンドンの繁華街ケンジントンやナイツブリッジにも歩いて行けるお洒落な街だ。漱石は、この博物館を友人で味の素を発明した科学者として知られている池田菊苗博士と共に訪れたことを随筆に書いている。2011年の暮れに2回目のロンドン勤務を始めた時に地下鉄スローン・スクウェア駅やキングス通りに近い短期滞在用フラットに2か月ほど住んだ。そこからすぐ近くだったのに行きそびれてしまったので気になっていた博物館だった。「カーライルの家」というナショナル・トラスト作成のパンフレットによると、1795年生まれのアダム・カーライルは19世紀のヴィクトリア時代の英国を代表する歴史家・評論家である。パンフレットには文豪ディケンズやサッカーがカーライルを讃えた言葉が引用されているが、漱石の訪問のことは記載されていない。「夏目漱石先生関係の展示物はないでしょうか？」と博物館の人に聞いてみた。案内の英婦人は笑顔になり、引出しの中から手製のクリア・ファイルを取り出して見せてくれた。同じような質問をする日本人の訪問者には慣れている様子だ。このファイルは漱石のカーライル博物館訪問に関しての日本の新聞に掲載された記事のコピーなどを一冊にまとめたものだ。後ろから「知らなかったわ」と日本語の声がした。観光客らしい二人組のご婦人だった。

この漱石関係ファイルを手にとって眺めるとカーライルと日本の関係についてまとめた論文のコピーがあった。それによると「フランス革命史」他の著作のあるカーライルは、数年がかりで仕上げた草稿を批評してもらう目的で友人に貸し出したところ、手違いで紙屑として焼かれてしまう。さすがに落胆するが、やがて気を取り直してもう一度原稿を書き上げる。不屈の意志で事を成し遂げた人として日本に紹介されて有名だったとある。このエピソードは中村正直がサミュエル・ジョンソンのオリジナルを和訳した「西国立志篇」によるものだそうだ。1870年に出版されたこの本は明治時代のベストセラーだったようで、高校の日本史の時間に習った記憶がある。ウェブサイトをチェックすると内村鑑三が1898年に書いた「後世への最大遺物」の中でも同様のエピソードが紹介されている。誰が間違えて草稿を燃やしてしまったのかについての詳細がやや異なっていることに気がついた。「イクラ不運にあっても、そのときに力を回復して、われわれの事業を捨ててはならぬ、勇気を起してふたたびそれに取りかからなければならぬ、という心を起してくれたことについて、カーライルは非常な遺物を遺してくれた人ではないか。」（内村鑑三「後世への最大遺物」、青空文庫より抜粋）

漱石が1907年に朝日新聞に連載した小説「虞美人草」に、主人公で京都から東京へ出て

きた青年が、かつて世話になって恩義のある井上老人から手紙をもらう場面がある。「拝啓 柳暗花明の好時節と相成候処いよいよ御壯健奉賀候(がしたてまつりそうろう)」(青空文庫より抜粋)。ここで使われている柳暗花明は「春の景色が美しい様子」という意味で、昔は時候の挨拶によく使われたようだ。南宋の詩人である陸遊の「山西の村に遊ぶ」という漢詩の一部である。ところがこの青年の心境はのどかな春の気分からは程遠い。恩人の先生の娘を妻に迎えることが正しい選択と考えつつも、古臭いしがらみに縛られるような気もして、板挟みの状態にあるからだ。東京という新しい天地で出会った自立心とプライドの強い近代的な女性にも魅かれてしまう。この状況を描いた小説に「四面楚歌」で有名な「虞美人草」という題名をつけるのは大げさな気もするが、昔はそういうものだったのだろう。



虞美人草はケシ科の一年草であるヒナゲシの別名である。麻薬の原料となるケシは越年草で背も高い。英語ではどちらもポピーとなる。漢字で雛罌粟と書く。この読み方としてはヒナゲシもコクリコもある。四面楚歌の状況に追い込まれた霸王項羽は「虞や、虞や、汝を如何せん」と思案にくれる。敗色の濃い戦の前線での話である。武人としては残りの手勢を率いて退路を切り開く仕事に女人を連れて行くわけにもいかないが、虞美人を残していけば敵軍の戦利品となるのは目に見えている。虞美人は味方の足手まといになることも、敵将の虜となることも良しとせず、自死を選ぶ。その墓に咲いた赤い花が虞美人草と呼ばれるようになったという言い伝えがある。

漱石はわたしの郷里長岡に縁のある人だ。旧制長岡中学出身の松岡譲先輩は漱石門下の人で、その夫人は漱石先生の長女である。ヒナゲシを詠った歌人と言えば、与謝野晶子がいる。1912年の5月に、前年に渡仏していた夫鉄幹を追いかけてシベリア鉄道でウラジオストクから陸路で欧州へ向かったこの情熱の歌人は「君も雛罌粟、われも雛罌粟」と歌った。もう一人旧制長岡中学出身の先輩に詩人堀口大學がいる。この詩人は歌人吉井勇に心酔し、与謝野鉄幹・晶子夫妻の新詩社に出入りしていた。大學先輩の父であり明治時代の外交官の草分けだった堀口九萬一と鉄幹は友人だったことがこの詩人の回想録に出てくる。「虞美人草」の漱石と「君も雛罌粟」の与謝野晶子と明治時代に赤いヒナゲシの花をめぐる作品を書いた文人二人ともが長岡に縁があるのが面白い。長岡市の信濃川にかかる長生橋のたもとには与謝野夫妻の歌碑もある。この歌人が、雛罌粟の歌を詠んだ時に、愛とプライドのためなら死も怖れない虞美人を意識していたのだろうか？余談になるが昭和の時代にもヒナゲシはひたむきな愛を象徴するものとして歌われた。山上路夫作詞、森田公一作曲の「ひなげしの花」を歌ったのはアイドルだったアグネス・チャンだ。愛する者と別れても「愛の思いは胸にあふれそうよ」と訴えるひたむきさは虞美人と共通の心情だ。時代は変わっても、人の想いは変わらない。

ユーラシア大陸の反対側に位置する欧州でも、この花は失われた人々の赤い血の連想につながっている。ロンドンでも毎年戦没者追悼の日には赤いヒナゲシの胸飾りが街にあふれる。第一次世界大戦が1914年に始まり、戦争は4年に及んだ。連合国側とドイツの休戦協定が発効したのが1918年の11月11日だ。事務所でもデパートでもこの日の11時には、戦没者をしのんで一分間の黙とうをささげるのが習わしだ。2014年のこの日には開戦から100年を記念して、ロンドン塔の空堀の芝生が一面のセラミックの赤い花で埋め尽くされた。88万人を越えた英国の戦没者の数だけ用意されたものだ。このセラミック花は希望者に販売され、その売上げが戦没者・傷痍軍人関係のチャリティに贈られた。漱石が小説「倫敦塔」を発表したのはロンドン留学から帰国して3年経った1905年のことだ。第一次大戦が始まる以前のことである。小説に描いたロンドン塔の空堀が虞美人草で埋め尽くされるとは、漱石も想像しなかつただろう。ちょうど去年の11月の始めに長岡高校の同級生のA君がロンドンに来ていたので一緒に見学したこともあって、この光景は強く印象に残った。

私の父親像

ガフニー タミー

今回の『英国春秋』秋号のテーマとは違いますが、偶然見つけたブログサイトの英和訳文が自分の気持ちにぴったり来たので、全文の引用（オリジナルは英文）を掲載させていただきます。英国日本人会の一会員になり「英国春秋」のエッセイとの出会いから4年目に入ります。

毎回の投稿者の方々の内容の深い文章に触れさせて頂き、投稿者夫々の各々の人生の歩みを味わうと共にいろんな角度から啓蒙されています。今回投稿する内容は一応、自分の人生の一部分に関わる内容になるのではないかと思います。下記の引用文を何度も読みながら、自分がこのような父親の側に居れたらという、心理的な憧れを抱きました。これからも、自分の架空の父親代理の真摯なアドヴァイスとして仰ぎ、還暦後の残りの人生を前向きに生きてゆく希望を持たせてくれました。本当に「言霊」とは、人を生かせる音の波動、文章にしたら、尚一層読み返すので生きてゆきます。人は、その生ある限り学び続け、進化せねばならないことも、改めて認識させられます。

大阪市内65%がB29の空襲爆撃を受けた戦後の昭和22年2月生まれ。天王寺区夕陽ヶ丘町9番地、曹洞宗の洞岩寺、に母が嫁いだ住所が当時の戸籍。しかし私の出生した戦後2年目の夕陽ヶ丘町は洞岩寺も含めて、空襲を受け、自分の記憶にあるのは無縁仏と檀家の墓地以外はまるで野原同然でした。周りには「土地ころがしに土地を盗まれないように」即席に建てられたバラックに近い平屋の家ばかりで、母が出産したのは住吉神社の近くの空襲を免れた、大叔母の家でした。当時、誰もが貧しかった時代の4歳で両親



が別居。私が小学4年生で弟が小学1年生の時、正式に籍を抜き母の旧姓名の村瀬になった後は母子家庭育ちの私たち。普通に一組の男女が夫婦で親業をしている日常生活体験を全く知らずに育ちました。26歳で1973年7月に1年間の労働許可証取得で来英して、まさかこのU.K.で42年間も住むなど当時は想像だにせず、還暦を半分以上過ぎたこの歳になっても、憧れるような父親像が偶然このブログで見つかりました。

2011年5月17 “ロケットニュース24”からの英文和訳コピー

『胸を打つオヤジからの18のアドバイス』

家族のなかでも、寡黙な存在の父親。若い頃は、とやかく言われるのが嫌で口も聞かなかったという人もいるのではないだろうか。歳を重ねると、今までの感謝の気持ちから、逆に照れ臭くなってしまったり、二人になると何を話題にして話して良かわからない事もあるかもしれない。それだけに、普段はしゃべらない父親の一言は重い。そんな胸を打つオヤジからの18のアドバイスをご紹介します。厳しい言葉ではあるが、いずれも愛情を感じずにはられない。これらの言葉は海外のブログ「Marc and Angel Hack Life」に掲載されていたもの。運営者のマーク氏は14歳の時学校の宿題で、家族に質問をしなければならず、その時に父親からこの18のアドバイスを受け取ったという。その後15年を経て、彼が29歳になったとき実家の屋根裏から、アドバイスの綴られたメモを引っ張り出して改めてこのメモを見たときに、彼は深い衝撃を受けたという。当時彼の53歳の父親は息子に強く生きて欲しいと願ったに違いない。その言葉の数々である。

1) 30歳、40歳、50歳と歳を重ねて行く時、歳をとったと感じないだろう。大人とは、歳をとった子どものことだ。年齢を重ねても、自分が歳をとったと感ずることはない。ほとんどの場合、自分が今感ずる以上のことを感ずることはないだろう。ほんの少し、若いときより賢くて自信を持っているだけだ。今までの人生で、この世界に自分の場所を作り、何が大切かを学んできたはずだ。成長することを恐れるな。むしろ楽しめ、歳をとるのは、とても素晴らしいことだ。

- 2) 悪いことは、お前と友人に起こり得る。人生において、予想外のトラブルは起こり得るだろう。例えば、職を失ったり、交通事故にあったり、場合によっては死の危険さえ訪れる。これら不幸の前に、我々は柔軟な反応を示すべきだ。苦しさのあまりに汚らしい言葉を叫ぶよりも賢く規律正しい行動をとるべきだ。怒りは問題をより悪い方向に導く。そして最悪と感ずる不幸は、そうめったには起こらないということ覚えておけ。不幸は、自分をより強くする機会でもある。



3) 誰にでも大きな変化を起こすことができる。例えば、1人の笑顔は世界を変えることができる。世界のすべてを変えられなくても、その人の世界を変えることはできるだろう。大きくなくてもいい、お前の手の届く世界を変えるように努めろ、今すぐ。

4) 第一印象で、その人のすべては決まらない。すべての人や物は、一目で見るといつも同じように見えるかも知れない。だが、10-20回、そして50回と関係を重ねる内に、本質が伺えるようになり、ようやく彼らを理解する道のりが始まる。

5) 一つのものに専念するとき得られる結果が大きくなる。

「継続は力なり」いろいろなものに手を出しているときは、大した影響も効果も得ることはないが、何かに的を絞って専念するとそのものの奥深さが見えてくるはずだ。結果が見え始めるのには時間がかかるが、常にその物事に集中するようにしろ。

6) 自分を愛し、自分のことを優先し、自分が自分であるように努力をしろ。自らの心身を育てろ。自分について、死ぬまでの人生から毎日を学べ。

7) 時々、重大な選択を迫られることがある選択を前にして、不確かな結果を恐れて、お前は自分にこう尋ねる。「挑戦すべきか、それとも止めておいた方が良いのか。何を失う事になり、何を得ることができるだろうか?」と。答えはこうだ。二度三度と失敗を繰り返して、自分が思う正解に近づく訓練をしていたならば、悩むのに費やす時間は少なくて済む。初めての挑戦で正解を得られる人はほとんどいない。事実として、常に正しいと思う事を実践するわずかな人たちは、以前から小さな挑戦を何度となく繰り返し続けているのだ。

8) 何かを得るためには、与えなければならない他の人びとを支え、貢献することは人生の最大の報酬の一つだ。お前の行うすべてが、遠回りして自らに返ってくる。

9) 戦う価値のあるものは多くはない。どんな形であれ、回避できるならば、絶対に、諍いを起こしたり争ったりしてはいけない。お前の配偶者、家族、隣人との議論からは距離をおけ。怒りが湧き起こっていると感ずるときに、低俗な言葉を叫びそうになったら、口を閉じてその場を離れるのだ。自分自身を落ち着かせろ。お前の意見が正しくなければいけないという必要も、議論に勝つ必要もない。それは大した問題ではない。

10) 誰にでも感銘を与えようとしてはいけない。意図的に感銘を与えようという行為は、エゴを押し付けているに過ぎない。その代わりに、人と本音で付き合うことだ。気心の知れた人たちと、より深いレベルでつきあう様に努めろ。

11) 何事も楽しめ。世間的に楽しみは過小評価されている。人生の重さの前で、楽しみは軽々しく見えるだろう。だが、そうであってはいけない。楽しみは不可欠なものだ。楽しみを持つ時間を率先して作れ。



12) シンプル~簡素さを保て。世界は、「シンプル」という素晴らしいものを隠し持っている。自分の人生をシンプルに保てるよう、お前が大切にしたい信条を五つ選んで、それに集中しろ。それ以外のものは放っておいて良い。多忙を捨てて、本当に重要なことを追求し楽しむことだ。

13) 些細な物事はお前と共にある。日常を取り囲んでいる些細な物事に、十分に目を向けろ。親になったら子どもが眠るのを見ることを好み、家族と一緒に食事の準備をする。そして、古くからの友人と笑いを共有すると良い。身の周りに溢れる小さな物事を大切にしろ。これらは人生がもたらす、本当の産物だ。

14) わずかな助言は、最高のアドバイス。人は多くのアドバイスを必要としない。大切なのは、生きて経験を重ねることだ。私が若かった頃とても難しい関係から結婚に発展した2人の男女の閃きは困難を越え彼らの生涯に情熱と幸福の火を灯した人の体験談は、それぞれユニークなものだ。経験は独自のものであり、それ自体がアドバイスとなる。人々が求めているものは、実はすべてその人のなかにある。人は皆、自ら考えて、生きていく時間を必要としており、結局、誰も役立つ指示を出してはくれない旅路を、自ら探索しているだけだ。過剰なアドバイスは必要ない。

15) 時間を管理しろ。環境と状況は常に変わり続けている。「重要なこと」と「緊急のこと」を混同しないように注意しろ。

16) 金を管理しろ。不必要なものを買うな。自らが稼ぐ以上に浪費するな。お金の管理されるな。

17) 学校では何を学ぶかが重要。授業の内容を理解できない時でも、心の思考プロセスは拡大し続けている。この積み重ねによって時間と共に、問題解決技術を習得しているのだ。このことを授業では教えてはくれない。そして、授業そのものも重要ではない。何を学ぶか、が重要なのだ。

18) 行動を起こさない限り、夢は夢のまま、で終わる。何かを夢見るのはもう止める。やりたいことはすぐ始めるんだ。今から、お前の40年後に、達成しないと後悔することは何か、感謝をしないと後悔することは何か、挑戦したいとおもうことは。やりたいことをやれ、そして感謝しろ。さらに挑戦するんだ！ 今すぐに！！



ベートーベンの第九が5ポンドで聴ける！

渡邊道英

私はロンドンに住んで、今年で11年目になります。

この間、新しく体験したことが沢山あり、中でも大好きなクラシック音楽を聴くことは至福の喜びです。殊に、毎年夏に開催されます『Henry Wood Promenade Concerts』は、とても日本では経験できない感動深い出来事です。

ビクトリア時代の建造物で名高い《アルバートホール》を主会場にし、約2ヶ月間（76番組）クラシック音楽の演奏が、連日連夜行われます。なんと今年で121回目、つまり121年間もの長期にわたって継続実施されたことになっています。さらに驚くべきことには、一度に八千人も収容できるホール（アリーナ）を満杯にする企画力と、参集するクラシック音楽ファンが存在するという事実です。いかにロンドン



が《伝統に裏打ちされた奥深い文化形成》と《成熟した市民の豊かさ》を醸成して来たか、その代表的な催しであると思います。年配のロンドン子の話では、彼が少年の頃、両親に連れてきてもらったことが、80年後の現在に繋がっているとの由。この親子の関係に感動を覚えました。そ話の中で、大変な興味を抱いたのは、あの「アルバートホール」のボックス席はじめ高額な席のチケットを入手するのは、貴族や裕福な人たちばかりではなく、一般庶民（貧しい人も含めた）にもチャンスを与えていたことです。当初から貧しい人でも参加できる席（立見席）が、用意されていたことです。それは現在まで継承され活かされています。会場最下段の『プロムナード』と最上階にある『ギャラリースタンド』がそれです。

8年前私は日本から来ていた奥さんがピアニストと云う山下夫妻と早朝からロングqueueに加わって『プロムナード』のチケットを入手、買えなかった《ベートーベン作曲の第九》を聴くことができました。心から感動し、最高の喜びに浸ることができました。それ以来東京の国立に住む若い山下夫妻は我が家に来てくれます。今年もブラームスの「バイオリンコンチェルト」を一緒に聴きに行きました。なんとチケット代金は「£5」でした。今日の為替レートで換算すると、日本円で千円弱でしょうか？東京の歌舞伎座の一幕もの（天井桟敷）でも1500円はします。ところで、当日券を求め行列をした英国人と接していると、年配の人、若い人を問わず”音楽に造詣の深い”ファンばかりでした。近い将来、音楽の専門学校に進学しようとしている少年少女、げんざい大学や専門学校で音楽を学んでいる学生。こうした《クラシック音楽の卵たち》が群がっていました。

四国の片田舎に育ち、地元の高等学校を卒業するまで、ラジオかレコードでしか聴けなかったクラシック音楽を、東京の大学に進学し、初めて『労音』でベートーベン作曲「交響曲第5番運命」のチケットを購入、新装した《上野文化会館》で生まれて初めて聴いたオーケストラの生演奏、あの感激は未だに忘れることができません。今更、ロンドンと東京の比較をしても詮無いこと、しかしながら一つクラシック音楽をのみ取り上げてこの充足感の差異ははなはだしく広く、深鍔物です。



ハンニバルと信長

— カンナエの戦い、桶狭間の戦い —

小川のり子

以前、友人との面白い会話があった。何かのはずみで私が「ハンニバルが・・・」と切り出したら、彼女から「ああ、あの殺人鬼のハンニバル・レクターよね」とかえってきたので、「あれ！」と一瞬驚いた。私のそれは別の人物であるが、しかしよく考えてみれば、彼だってローマ兵士を何百何万と殺戮しているのだから、殺人鬼と呼ばれてもおかしくはない。



この春イタリアは南、アドリア海に面したアプリア地方を訪れた。首都バリの街並みを外れるとすぐに、オリーブ畑が続き、ところどころに菜の花の黄色やアーモンドの花のピンクが色を添えた、田園風景が広がってきた。先刻、標識に **Kannae** と出ていたが、この地である歴史に残る血で血を洗う壮絶な戦闘がくりひろげられ、カルタゴの将軍ハンニバルの名を後世まで留めた戦場となったとは、まったく信じがたいのどかなものであった。

古戦場とはどこもそうであるが、血の跡もなければ、錆びついた楯や折れた槍の先が地中から突き出ているわけでもない。多くは「夏草や、兵（つわもの）どもの、夢のあと」である。車中よりこの紀元前の“夢の跡”をぼんやり眺めていると、突然、桶狭間の戦いのことが頭に浮かんできた。若い頃は信長鼻根で、山岡荘八の桶狭間の巻など胸躍らせて読んだものであった。そしてこの全く時代も国も異なる“合戦”ではあるが、大きく共通したものがあるのも不思議である。それは、どちらも相手軍の半分以下の兵力で“作戦勝ち・圧勝”しており、それ故に戦いの名が二人のリーダーの代名詞にもなっている点である。だから二つを結びつけるのも、「まんざら荒唐無稽な話でもない」と自分自身に言い訳。ついでに、荒唐無稽とは、信長がハンニバル伝を読んで、“包囲殲滅戦術”を借用したと考えることであるかも知れない。蛇足ながら、現在でもこの戦術は陸軍学校の教材に参考文献として引用されていると聞く。湾岸戦争の総司令官シュワルツコプフの頭の中では、平地戦の模範であったらしいが、残念ながらイラクの砂漠では実現できなかった。



ハンニバルを総司令官に迎え、カルタゴ・ノウア（スペイン）を出発した5万の軍団は、前年にピレネーとアルプスを越える。戦力として連れてきた40頭の象のほとんどは、イタリアの冬の寒さに順応できず戦わずして戦死（？）させてしまう。さらに南下して中部イタリアに入ったカルタゴ軍は、紀元前216年6月にトラシ

メヌス湖の戦いで圧勝。1万5千のローマ軍をゲリラ戦で隘路に誘い込み殲滅させる。ハンニバル側の犠牲は僅か1,500名。言い伝えでは、戦場の周辺は数日間血で染まり、近くにある川の流れまで血に変えたそうである。この古戦場に近接する“Sanguineto”の町の名が、“血の川”を意味するのはそれ以来のことであるのだろうか。

8月にはさらに南下し、ローマの穀倉地帯である現在ではアプリア県カンナエに到達。アドリア海沿岸を走る高速A14号線のホッジアとバリの中間、オフアント川下流沿いに位置したカンナエは記念碑以外、何もない。ここが古代世界の天下分け目の戦場になった、と想像するのは難しいのどかな田園風景である。南下したカルタゴ軍を追うローマとイタリア同盟軍は歩兵80,000、騎兵6,000、対する出身地でまとまったカルタゴ軍は歩兵40,000と騎兵10,000。結論から言えば、血気にはやる若い執政官2人を指揮官と仰いだローマ軍は装備、士気、兵力で優れていたにも拘わらず惨敗する。頼りにならない傭兵を抱えた自軍の弱点を逆手にとったハンニバルの心理作戦に負けたようだ。

ローマ軍は中央に対峙したスペインやガリアからの傭兵を相手にして勝利を確信し、勝ちどきを上げながらまっしぐらに前進。中央突破した段階で、側面のカルタゴ軍騎兵に背後に回られ、さらにアフリカ出身の最強予備兵を動員したハンニバルに退路を塞がれ完全包囲される。しかし気付いたときは“時すでに遅し”でローマ軍はパニック状態に陥り、その上彼らは重装備で身動きが取れず、自らの重みで味方を押し倒してしまう。ローマ軍の半数以上は虐殺され、残りは捕虜か脱走でカンナエの戦いはローマの惨敗で終りを迎える。

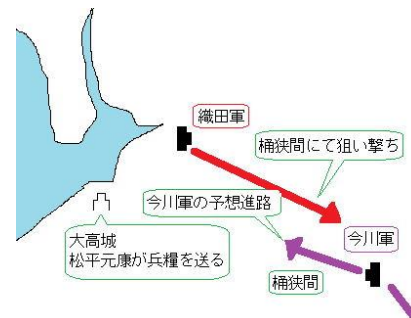
ローマに捕虜の身代金付返還を持ちかけたハンニバルを、ローマ元老院は拒絶、半数の捕虜は南イタリアの奴隷市場で売り飛ばされ、残りはカルタゴに送られる。軍事力と規律で地中海北部を支配してきたローマは、敗残兵には厳格極まりなし。しかし、このローマの軍事力と規律の厳しさと対照的に、イタリア半島から退いたハンニバルを冷遇したカルタゴ元老院は、策略に拘泥し、腐敗していく。その後のハンニバルは不連続きである。自国に愛想を尽かしシリアに亡命。そこで軍事顧問となるが、戦果を挙げられず、最後はローマからの追手を察知して、自らの命を絶ってしまう。享年54才であったそう。

カンナエの戦いから気の遠くなるような歳月が流れ、地中海の覇者であった、カルタゴ帝国もとっくに滅亡してしまっていた。時は移り西暦1,560年、日本はまさに群雄割拠の戦国時代。各地では天下平定を狙って武将たちが、我こそはと虎視眈々と好機を狙っていた。その中から、若い頃は“尾張のうつけ”と呼ばれていた織田信長の登場で、その彼を一躍有名にしたのが、この“桶狭間の戦い”である。しかし、これについてはカンナエの戦いのように歴史家による統一された綿密な記述がない。“迂回攻撃説”や“正面攻撃説”等諸説があり、それによって解釈も少々変わってくる。そこで昔の愛読書、山岡荘八の小説「織田信長」をも参考にさせてもらったので、後述のは史実そのものではない。



清州城の城主織田信長は、今川義元の総攻撃に対し籠城で抗戦すると宣言。大軍の前になすすべ非ずとみられるが、彼自流の「すべてか無か」からして本音ではない。現に義元とその直屬部隊5,000が大高城に向っているという情報を得ると、あたかもそれを待ち構えていたように、近臣4~5人を引き連れて熱田神宮に戦勝祈願に飛び出す。信長公出陣の報を聞いて駆け参じた家臣、百姓、野武士など入れて約2,000、今川軍の半分以下であるが、信長の燃えるような闘志に兵士たちの士気は十二分に高揚している。

しかし信長のもとには織田配下の各地の砦が落ちたとの悲報が、次々と届く。実際、天下



平定・上洛の名目で尾張に繰り出された今川軍勢は、25,000、かたや織田軍は5,000、そして桶狭間の戦いに投入された兵力は、今川軍5,000、対する織田軍2,000。両軍が一堂に会したカンナエのような総合戦ではない。ここで総大将、信長の鋭い洞察力、現状の正確な把握と迅速な行動力がものをいう。それには諸々の策略がすでに布石されていたとある（家中の粛清、野武士との連繋、籠城の偽装、礼の者の利用等）。しかし、信長のその後の運命を変えたこの戦いには、もちろん“運”も大いに作用しているように思われる。

実は、私はこの桶狭間の古戦場跡には行ったことがない。歴史の本には、現在の愛知県豊明市のどこかとあるが、他説もある。地形的には田楽ヶ窪と呼ばれる山間の窪地のようなところであつたらしい。そこへ今川兵5,000人が、ところ狭しと天幕を張ったりしてひしめき合つての休息。見渡しの効く平地ではなく、その上あいにくの豪雨に見舞われて、今川軍には雷光や雨音にかき消されて音も立てず近づいてくる織田の軍勢には、気が付かなかった様子である。最初はそれが味方の謀反と勘違いした者さえ出現。大将の義元は鷲津・丸根砦の攻略の報に気を良くし、その上挨拶伺いの土地の者（礼の者）から送られた酒に酔い、謡曲3番を謡うご機嫌であつたとある。この混乱の中で、義元はあっ気なく討死する。その際、切り付けられた織田軍の毛利新助の左手の指を一本食いちぎつての無念の死であつたと伝えられる。しかし圧倒的に優位に立つ今川軍ではあつたが、大将討死の報がもたらした兵士達への影響は甚大である。勝利に次ぐ勝利で士気は十分上がつていたはずの今川軍は、この報で総崩れになつてしまつたのだから、義元がそれを知つたらどう思つたことだろうか。

歴史で、“もし”は許されないだろうが、もし義元がここで休まず大高城に到着していたら・・・もし義元が死んでいなければ・・・、日本の歴史は大きく変わつていたに違いない。この後信長は次々と各地の武将を平定・統一し、安土・桃山文化と呼ばれる絢爛豪華な時代の先駆けとなつて行く。しかし桶狭間の戦いから数えて22年後、明智光秀の謀反で宿舎本能寺が敵に取り囲まれ逃げ道がないと悟ると、自らの命を絶ち、同時に寝所に火を放つて炎の中に消えて行く。享年48歳、「すべてか無か」の男の最後であつた。

英国春秋あれこれ

今年の初め、在英40年だった友人が日本へ帰国した。オペラとアフリカとスコーンが好きだったし、実入りも良くやり甲斐のある職にも就いたので、決心を聞いて少々驚いた。文句の多い彼女が、帰国に伴う退屈で面倒なすべての儀式を、何も言わず黙々とこなしているのを見るのは驚異でもあつた。「何が彼女を故郷へと駆り立てているのか・・・」と。

今年の夏、甥の結婚式の為一時帰国をした。そして数ヶ月ぶりでのその友人と再会。オペラもアフリカもスコーンもなく、連日30度を超える猛暑の日本の生活が、さぞや大変だろうと、彼女からの大いなるグチを期待していたのが、それは見事に裏切られてしまつた。暑さと時差ボケでげんやりしている私の背中をポンとたたいて、「あなた、早く帰つていらっしやいよ！」と反対に励まされてしまつた。

私は何事にでもこれとした“理由づけ”が必要である。地震と台風が多く、安保法案を強行可決する自民党の日本か、雨と監視カメラが多く、鉄道を国有化に戻すと断言する労働党が政権奪回を試みるイギリスか、どちらに住むのが幸せか、今、思案中である。



『英国春秋』 2015年秋号 (No.27)

編集人 小川のり子
発行人 佐野圭作
発行所 英国日本人会
事務局 c/o JEIB
3 London Wall Buildings
London EC2M 5PD

原稿の送り先 ogawa@japanassociation.org.uk 又は
Mrs M Hodgson 492 Canterbury Way, Herts.SG1 4ED